は國家が全力を擧げて、保護しなければならぬと云ふことになつて居ります。是は既に述べました如く西洋の中世紀に基督教徒が羅馬を滅して、法王政治を布いた時に發した思想であります。さうして長く法王の權力が國家を支配して居りましたからそこで此の天命を行ふ爲めに、國家が在ると云ふ思想が餘程深く入つて居つたのであります。然るに十六世紀の宗教革命以後に至つて此の天命說を覆へして、今度は個人本位說を採るやうになり、個人本位の中でも近世の思想は個人の利益を保護する爲めに國家はあるので、其の利益を保護すると云ふ中でも、人民の財產を保護する爲め、個人の富を保護する爲めに國家が存して居ると云ふ思想が固まつて來て居る。昔は神樣の思召を行ふ爲めに國家が在ると云つたのが、今は個人の財產を保護する

爲めに國家が在ると云ふことになつたので、どちらも其一方のみでは完全の說ではありませぬ。所で此れは一つづゝに離して見るべきでない、此二つのものを兼ね併せたる思想より成つて居るものが理想の國家であると唱ふる人もあるのであります。

(八) 法治說

此の說は有名の「カント」などが主張した說でありまして、國家の目的と云ふものは唯、各個人に法律上の安寧を與ふるのである。法律を實行する機關として國家が存して居るのであつて、更に是以外の事を爲すときは皆無用の干涉である。國家は人民の間に協定せられたる法律を實行する場合に、其の實行を滑かにして行けば宜いので、それ以外に手を出したら國家以外の越

權の所爲であると云ふ風に國家の權限を縮小して、唯、法律を行ふ爲めの任務に國家が起つて居ると云ふ說を取つて居る。是等は法律學者の頭に餘程入つて居るのでありまして、國家は唯、法律を行はしめんが爲めに起つたものであると云ふ考を有つて居る人も我が國に段々出來て居ります。

(二) 人民保護說

是は國家は人民を保護すると云ふ一點に歸着するので、個人本位說に似て居りますけれども、此の人民保護の爲めに國家が存在すると云ふのは極く意味が狹いので、唯、此の人民の生命とか財產とか權利とかを保護する爲に存して居ると云ふ說で、矢張り法治說と同じく、法治說は法律を行つて往く爲めに國家が

在ると云ふが、其の法律の內容を考へて見ると、人民の財產とか生命とか權利とか云ふものを保護することを、規定して居るのであるから、それに依て人民を保護する爲めに國家が存して居ると云ふやうな狹い意味に取つて居るのが此の人民保護說である。それ故少しでも此外の事に手を出すと干涉であるとか壓制であるとか主張する者が出來て來るのであります。

(ホ) 公共幸福說

是は少しく意味が廣く、國家の目的は一般國民の幸福を增進するにある。さうして其の幸福は單に物質上ばかりでなく、無形の事例へば音樂、美術、繪畫とか或は公園を拵へると云ふやうな事も、總て國家が人民の享樂の事を手傳うてやる爲めに存し

て居るものである。人民の爲めに色々の設備を國家がして、公園を拵へるとか音樂堂を建てるとかするのは、人民の樂みをする娯樂の機關を設けるのであつて、勿論人命財産の保護もするが、重もに人間を面白く暮らさせる意味に於て國家の目的は存して居るのであると云ふ說であります。

（へ）人民制御說

是は更に意味が狹い說で、唯、惡い人間だけを制御して行けば宜い、良い人民は別に世話をやいて構つてやらんでも差支ない、けれども惡い者があつて、良民の幸福を害する場合にそれを國家の力で取り鎭めて吳れゝば宜いのである。それ以外に善良なる人民に對しては、別に干涉する必要なしと云ふ風に考へて居

るのであるから、此の思想が段々進んで行けば國家と云ふものは不必要であると云ふやうになり、西洋の社會主義のやうな所まで進んで行くであらうと思ひます。

（ト）對外關係說

是は國內の事には國家の必要がない、唯、國外の他國に對する場合に、交涉事件などが起つた時分には人民が其の衝に當たる譯に行かぬから、人民を代表して外交上にさへ働けば宜い、內治の事は人民の自由獨立に任かして置いて差支ない、國家の目的は、對外關係に於てのみ存すると云ふ風に考へて居る說でありまして、段々國家の目的を小さくして見て行く思想であります。

(チ) 國家實利說

是は國家を中心にして、國家の實利實益を計る爲めに存して居る、言葉を換へて云へば團體の利益を保護するを以て目的とする、個人の利益を無視する譯ではないけれども國家の目的は個人の利益よりは、全體の利益を保護するを以て目的とするのである。故に國家の法律を作る目的は個人の事を支配するよりは其の國家の幸福、國家の實利實益を增進することを目的として法律は制定せらるべきものである。總ての法律は國と云ふものを强くし、國と云ふものを進めて行く手段に設けられるものであつて、國を忘れて人民の爲めに法律を作ると云ふことはないと云ふ思想であります。更に此の思想が進むと國家の爲め人民

を犧牲にすると云ふ精神も起つて來るのであります。

(リ) 國家至上說

是は、何ものをも國家の爲めには犧牲にして宜いと云ふ思想でありまして、國家なるものは人間の知識が最も進歩したる上に生じて居るので、國家と云ふものは非常に高尙なる產物である。人間文明の中に於て最も高尙なる產物は國家である。故に國家と云ふものは尊敬しなければならぬ。吾々の感情を以て之を論ずるならば非常に之を讃めて、國家と云ふものを拜まなければならぬ。それであるからして本人に於てどれ程大切なものであつても國家の用に立つる場合には、總て犧牲に供させて宜いものである。更に進んで云へば宗教でも道德でも又何ものでも國

家と云ふものゝ爲めには、總て犧牲にして少しも躊躇することはない、國家と云ふものが何ものよりも大事のものであると云ふことを主張する思想であります。此の中には無論一個の眞理を含んで居りまするが、併し言ひ方に癖がある。即ち國家至上論は何ものをも犧牲にして宜いと云ふのは癖であります。もう少し圓熟した思想で、國家の絶對であると云ふ意味が認められなければならぬのであります。

(ヌ) 理想的國家說

是は無論人民の幸福を保護すると云ふのも、國家の目的でありまするが、それと同時に道德の側に於て國家が之を培養して行く目的を有つて居るのであります。此の理想と云ふ中に於ても

其の道德を唯、國を思ふと云ふ考、唯、國家觀念だけを見て行く思想もあり、國家觀念と併せて個人の道德、進んでは世界の人道を保護すると云ふ、即ち國家より見ては客觀的道德である個人的の道德、人道的道德を開發して行くと云ふ所まで上ぼることが出來る。是は一方から云へば道德的國家觀であります。

無論利益幸福の思想も忘れては居らぬが、他の思想と異る所は國家の目的は人をして、立派なものにしようと云ふ個人道德にも乃ち國家的道德を中心に置いて、それより個人的の道德、人道的の道德が進んで行くのである。國を思ふの道德を強くすれば、それに依て個人の品性は益、進められて行き、隨て世界の文明人道と云ふものも、此の國家に依て段々開發されて行くと云ふ風に有らゆる方面を調和して國家が進んで行く、個人の德

性も世界の人道も皆融和して進んで行くと云ふ所に、理想的の國家が存して居ると云ふことになるのである。此の意味が充分に明かになつて居るのが日本の國家の理想であると私は思ふ。國家至上說のやうに一概に有らゆるものを犧牲にするのではない。場合に依れば個人も犧牲にするし、場合に依れば世界の人道を不問に置くこともありますけれども、根本の思想は道德的國家觀を中心にして、國家の力を以て個人の德性を導き又世界の文明をも進めて行く所の理想を以て立つて居るのが、日本の國家であります。そこで此思想を唱へた學者は西洋にもあります。それは古く希臘の「プラトーン」の唱へた理想的國家觀は確かに參考になるものであります。又「ヘーゲル」の道德的國家說もさうで是等は確かに(十)の理想的國家說を說明する所のも

のである。此の思想を能く吟味し、此の思想を進めて行き、さうして我が建國の大精神に對照して考へて見たならば、西洋の國家觀の健全の方面は、採つて以て我日本の御國體の精神に合して見ることが出來るのであります。

前來列擧した諸種の國家觀は、皆極端に走つて居り調節の能力を缺いて居り、一の事を考へると直ぐにそれに囚はれて仕舞ふ弊がある。我が國の學者としては大津淳一郎と云ふ人が我が國家主義に付て道德的の意義を缺いて居り、法律萬能の精神に囚はれて居るのを慨歎に堪へぬと言つて盛に論じて居る。氏は『憲政と道義』と云ふ題の書物を昨年四月に出版して居ります

が其の中に斯う云ふことを言つて居る。

道義は宇宙に磅礴たる眞理にして建國の本義全く玆に存

することを認識し之を信ずること愈、厚く雄を五大洲に稱せんと欲せば主として道義の精神を發揮せざるべからず云々

即ち道義は宇宙に磅礴たる眞理であつて、我が國の國を肇むるの本義は道義を根柢として居り、それに依て國を建設したるものである。故に我が國が雄を五大洲に振はんとするならば益、道德的の精神を中心にして、國威國光を輝かさなければならぬと云ふことを申述べて居るのでありまして、是は理想的國家觀の方面を言ひ顯はして居るものであります。

それから法學博士上杉愼吉氏の『帝國憲法綱領』の中に言つてあることを見ると……是は一時評判の喧しかつた書物で昨年六月の出版であります。私共は別に憲法や法律などの事は一向に

研究しては居りませぬが、併し國家觀念に關する事に付ては深き意味がある書物と思つて見たのであります。所が其の中に國家を道德的に見なければならぬと云ふことを書いてある。其の他の所には建國の事實精神を後にして、憲法の規定に依て國家を說明すると云ふことになつて居ります。我が建國の事實精神を先に見ずして、憲法の規定から見て行く法律學者の說は面白くないやうでありますが、國家を道德的に見て居る精神は確かに參考となるものであります。即ち

國家は諸德を包含し之を統一する最高の善なり

と云つてある。是は最高の善を發現する體制なりと云ふやうな意味であらうと思ひます。人間の有らゆる德を包含して統一しさうして、其の最高の道德を實現して行くに必要なる組織形體

を成して居るものが國家であると云ふとであらうと思ひます。此の大津淳一郎君なり上杉愼吉君の言はれた所の思想は是等の人に依て發明せられたものかと云へば決してさうでない、斯う云ふ思想は西洋の「プラトーン」の思想から起つて來て居るのでありまして、「プラトーン」は盛に理想的國家を說明して居るが、近世文明の國家と云ふものは人民本位である而かも人民の利益本位であると考へて居つた所に、缺陷があることが分つて來たから、ずつと古い所の希臘の古代の思想に戻つて國家の目的は一の理想がなければならぬ、道德的精神がなければならぬと云ふことに復歸し來たのではあるまいか。そこで極く古い所に戻り掛けて居るのである。所が斯う云ふ方面の學者と違つて同じ法律家でも非常に我が國の建國の精神を能く調べ、又佛敎

の敎義などを能く調べて、さうして堂々と國家の目的を說明して居る學者は筧博士であります。それから佛敎の中から出た人では井上(圓了)博士の我が國の國體觀の如きは理想の方面が餘程よく發揮されて居る。又こゝにお出でになる佐藤少將の國防史論に於て『無上崇嚴なる御國體と其の擁護』を說かれた邊り、日本の有して居る天職、目的と云ふやうのことを論ぜられて居る所などを見ると決して一方面に局した思想でないことが能く解かる。それから姉崎博士の近來盛に主張して居る『我が國の御國體は靈德と理想』又小笠原子爵の言はれた所の『靈氣不可侵』と云ふやうな說は皆理想的國家と云ふ事に付て其の內容を說明されたものであります。斯う云ふ方々の國家を觀る思想は何れも立派なものであります。是は前に述べたる如き色々

の西洋の學說に滿足せざる爲めに起つた思想であつて、我が國の建國の理想を發揮する所の立派なものであると思ひます。唯茲に特に注意しなければならぬのは、斯う云ふ說を吐いて居る人は皆佛敎の學者であり渴仰者であるの一事であります。筧博士は日本の法律學者として、佛敎に熱中して居る人であります るし井上博士は固より僧侶であり、佐藤、姉崎、小笠原の三氏は日蓮上人の鑽仰者として有名の人々であります。斯う云ふ點から推して考へますれば、佛敎の思想と國家觀の間にはどこかに思想の系統の繫りがあることゝ思ふのでありまして、そこは餘程注意すべき事であります。

然るに我が國の人々は、宗敎の觀念と國民道德の觀念とは緣が遠いものと考へ、古神道と儒敎との二つが我が國家の觀念に大

關係ありと思つて居る者が多いやうである。國民道德讃書、國民道德の參考書には皆神道家とか儒敎を學んだ人を擧げて、佛敎を學んだ人は一人も擧げて居らぬ、爲めに日本人の多數の理想と云ふものは世界的思想を包容することが出來ない。又哲學的の根據が明になつて居らない、これは餘程大事の點であります。此點に關しては更に申上げたいこともありまするが、先づさう云ふやうな譯でざつと十種の學說に依て國家の目的と云ふものは說明せられて居るのであります。

序でに一言して置きまするが、「ヘーゲル」が言つて居る國家思想と云ひますのは人間が個人として道德を行はんとしても、ただ個人と個人とだけであつたならば、人間の道德は完成することが出來ない。即ち一方に道德を守らない者も出て來る。社會

の秩序が維持せられざる場合には、一方に德を行はんとしても德を行ふことが出來ないことゝなる。國家の組織形體が人類の中にあつてこそ、始めて人間の道德が行はれるのみならず人間の理想と云ふものは社會的に大きく進んで行くものである。其の大きな道德、人間の立派な道德を發揮するのは結合の力に依る、其の結合の力を實現して居るものは國家である。國家の組織を認めないで、又國家の力を藉りないで事が出來ると思ふのは、其の人間が本統の理想を有たないでけちな心を有つて居るからで、眞の理想があり道德の實現を眞面目に考へたら、直ちに人民の結合を要し、其結合の力は國家的組織に依らなければならぬとが解る。故に個人の道德精神理想が眞實であつたら、そこに國家と云ふ形體組織がなければならぬのであると云ふ

とを主張するのでありまして、非常に是は立派なる說であると思ふのであります。又世界の人道と云ふか文明を進めて行くにも國家の組織體に依らなければ、決して進むことが出來ないのである。之に付きましては穗積博士が今の文明に於ては國家の組織體を要すると云ふ意見を述べられて居りまするが、其の事は詳細に御紹介し、それに自分の考をも附け加へて申上げたいと思ひます。

其の前に少し重複するやうでありますが、「プラトーン」の思想及び「ヘーゲル」の思想は確かに參考になることゝ思ひますからお話して置きたいのであります。

「プラトーン」は希臘の古い時代に出た哲學者でありまするが、其頃に於ける希臘の國家は民心の結合か缺けて盛に個人思想

自由思想が起つて來たのを見て「プラトーン」は非常に之を慨いて、眞の國家と云ふものは個人が全體の爲に結合して盡すと云ふとでなければならぬ。個人々々が互に分立した思想を抱いて其自己の都合を中心にして働くと云ふやうなとがあつたならば迚も完全の國家と云ふものは成立しない。さうして國家と云ふものはどこまでも其の目的を道德に置かなければならぬ。啻に國家が道德を理想とするばかりでなく、其國民の個々夫れ夫れを總て道德的の人民に仕上げると云ふことを、國家は考へて居らなければならぬ。即ち國家の行動が道德を理想とするばかりでなく、國家の仕事は先づ以て國民を道德的に仕上げることに力を注がなければならぬ。さうして斯かる理想の國家が働く時に於て、始めて個人と云ふものが道德的の人となることが

出來るのであつて、唯、各個人が道德を理想として居つても國家が道德を理想としないならば、到底個人の道德的生活と云ふものは完成せらるゝものでない。個人々々の道德も國家の力に依て始めて出來上がるのである。而して國家の道德理想と云ふものは丁度個人が道德的に教育せらるゝのと同じ樣の有樣のものである。例へば個人の德育に於て智情意の三方面が完成されなければならぬと云ふことであれば、國家の道德も矢張り此智情意の三方面が完成されなければならぬ。個人の道德を完成するのと、國家の道德を完成するのとは同じやうの意味合を有つものであると云ふことを論じて居ります。……吾々の道德なるものは精神の要素となつて居る所の意味の語で云へば『智、情、意』の調和的高度の發達を指すのであつて又『理性、心意、慾

念』と云ふ字を用ゐて之を顯して居ります。

智—理性……聖知又は睿知
情—心意……勇氣
意—慾念……節制
正義

『理性』は知識を完成するものであつて、こゝに云ふ知識と云ふのは今日所謂科學的の知識を主とするのではありませぬ。孔孟の教に謂ふ所の『聖知』とか又は『睿知』とか云ふ意味のもので、知識の中に道德的の意を含んで居る、佛教にては之を『般若』と申すのであります。此の理性は德と合した知識が發達して行かなければならぬ。又心意の方に於ては『勇氣』、慾念の方に於ては『節制』と云ふ德が伴ふので理性は人間の有らゆる働きを統一して行く所の德の中心になるのであるし、勇氣は此理性を助

けて外から來る誘惑に抵抗するとか、或は苦痛を恐れないとか、又は事に臨んで正しき判斷を與ふるとか、徒らに死を恐るるやうの卑怯の心が無くなるとかするので、知識に勇氣が加はつて働くとさう云ふ德が完成せらるゝのである。それから一方の慾念は、人間の心から切り離すことの出來ないものであるけれ共、之を獨立させて働かしたならば邪の方に行き易いから、是は理性の支配を以て適當に導いて行くやうにしなければならぬ、此慾念が、理性に依て支配された場合に節制と云ふ德が完成されるのである。さうして此三つが適當に調和されて、いつも此三つのものが充實した力を以て働く場合に、そこに『正義』の德が發現するのである。故に一言で云へば智情意の三方面の德が調和して高い意味に活動して行く場合を正義の德と謂ふ。それ

で人間が社會の共同生活をして、社會を作るとか國家を作るとの出來るのは、畢竟此正義の德を個々の人間が養ふ場合に於て始めて其目的が成就せらるゝのである。さうして其共同團結の形は國家の形を以て成立つのが一番良いのであつて其國家的組織を成したる團結を通じて、始めて個人々々の理想道德と云ふものが成熟するのである。此國家的の結合體を通さずして到底個人の道德と云ふものが完成せらるゝものでない。國家が完全なる形を成して、前きに言ふた如くに道德を理想として進んで行く場合に國民が眞實の德を成就することが出來るので、理想てあつた道德が此現實の社會に顯れて來るのである。簡單に云へば理想の國家に於て始めて人間の『至高善』が實現せられ、正義が實現するのである。理想の國家を取り離して、そこに正

義とか完全なる道德を實現しようと云ふのは、空想であると云ふことを「プラトーン」が論じて居るのであります。

此說は永久の眞理を含んで居る。今日進步したと自ら許して居る我國現在の學者の思想にも此一面がどこまでも伴つて居る。さうして、我御國體の意義の上に無論此思想は根本より包含されて居るものであることを忘れてはならぬと思ふ故に是は「プラトーン」の說であるが、遠く希臘に居つて遙かに日本の御國體の理想を景仰して居るものと見ることが出來ると思ふ。

次に「ヘーゲル」の理想の國家と云ふものを簡單に御紹介致しますが、是も矢張り「プラトーン」の說と同じ樣な傾きを示して居るのであつて、人間の道德は自己の主觀的にある良心と云ふものばかりにては成就することは出來ない。儒教に於ては道德は明

德の發現であるとか、良知良能の作用であるとか云ふことを說いて居るけれども、唯、人間を個人として置いて、其の有つて居る明德とか良心とか云ふものだけで、到底道德が完成せらるゝものでない。社會的に己の外にある結合團體としての關係を通して、そこに秩序を保ち其團體の發達を理想として行く場合に始めて人間の道德と云ふものが成立つて行くのである。此團結と云ふものから切り離されたる、個々と云ふことにして仕舞つたら到底道德は完成しない。故に個人が家庭と云ふ中に入つて團結を取るときには家庭的の道德が顯れ、社會と云ふ團結を取るときは社會的の道德が顯れ、國家的の結合を成すときは國家的の道德が顯れて來るのであつて、此家庭なり社會なり國家なりと云ふ結合團體を切り離して個々に分立することになると、

そこに眞の道德は成立するものでない。さうして其團結の姿、即ち體制と云ふものは如何なる形の團結が一番大切であるかと云へば、家庭的の團結、社會的の團結と云ふものも貴いものであるけれども、國家的の團結に至つて始めて吾々が理想の生活が出來るものである。故に國家を通さずしては個人の道德は完成しない此團結の完全なる形、語を換へて言へば理想の國家が人間個々をして此人生に於て道德の生活を營ませ、個々の有する所の理想を實現せしむる所の力となるのである。さうして其の國家の政體は如何なるものが宜いかと云へば、立憲君主政體が一番宜しい。……「ヘーゲル」は獨逸から出た人でありますから獨逸の國家の組織に對して、さう云ふ考が浮んだかも知れませぬが、兎に角立憲君主政體が理想の國家であると云ふことを申

して居るのであります。

斯の如くに「プラトーン」でも「ヘーゲル」でも俱に國家は道德を目的として、さうして國民個々の人格も國家の力に依て道德的に仕上げて行くことを理想とし、隨つて國民の方よりも國家を擁護することに於て、始めてこゝに道德が完成せらるゝことになるので、此兩方面が道德的に結合し、國と民とが結合すると云ふ所に理想を築いて居るのでありまして、是は確かに參考になる說と思ひます。

(七) 我國體に關する觀念

(イ) 文明程度說

是は今の文明に於ては、國家的組織に依て進んで行くより外總ての目的を達することが出來ない。個人の幸福も世界の文明も道德の理想も總てのものが、此國家組織體の上に於て、完成せらるゝと云ふことを主張するのでありまして、此說は我國に於ては愛國的憲法學者と稱せられて居つた穗積(八束)博士が熱心に主張した說であります。今此說の大要を御紹介致しますれば、

此人類の過去の歷史を考へて現在の有樣を調べて見ると云ふと、世界の文明は國家的の組織構成を以て進んで行くことが生存競爭の原則に適合して居る所の大切の箇條であつて、人類が結合する所の中心點は、國と云ふものに歸一するのである。要するに今の世界は國家時代の世界である。國家の組織に依らずして今の世界に對抗して行き、今の世界に獨立し

て行くと云ふことは出來ない。然らば國家とはどう云ふ意味のものかと云へば、土地と人民と主權との三つの要素から成立つて居るものであつて、一定の土地を自己の領域領分として居ると、人民は其中に共同の團體を組立てゝ居ること、さうしてそれが唯一の主權に統治せられて居る所の、社會の形態を國家と謂ふのである。古今東西の歷史を大觀して見ると云ふと、時には國家と云ふ組織を小さいものと考へて世界的に宗教を中心に置いて、さうして世界の人類を統一しようと考へた者がある。それは理想と云ふか道德と云ふか宗教と云ふか、兎に角形の方からでなくて精神界に於て世界の人類を統一しようと計つた者がある。それは基督もさうであるし、一方から云へば釋迦牟尼も、さう云ふ理想であると云ふこと

が言へる。けれどもさう云ふ理想は今迄の歷史に於ては實現せられて居らない。又一方には英雄が起つて國家組織を小なりとし世界を武力の上に於て統一しようと考へ、大戰爭を起して有らゆる人類を自己の主權の下に降服せしめようと計つた英雄もあるけれども、それも遂に其の目的を達することが出來ずして終つて居ると云ふものは、今の文明に於ては、まだ世界を統一して事を行ふ所迄達して居らぬ。現今の人類進化の程度に於ては、國家の體制組織が生存競爭の要件に適つて居るものだと云ふことが明かになつて居るからして、簡單に云へば今の世界は國家時代の世界である。國家の組織を超えて、さうして精神の上から世界を統一するとか、若しくは單に武力を以て世界を統一すると云ふことは、今の世界に於ては

空想である。故に自分は人類の一人である、世界の一員であると云ふやうなことを云つて、愛國の精神を狹いものだと嘲けるやうの者があるけれども、さう云ふ人は現代文明の程度を知らぬ人である。若しも今の文明に於て唯、さう云ふ懸け離れた事ばかり考へて居つたならば、其の國は遂に滅びざるを得ぬ。隨て其の人民の福利と云ふものも失つて仕舞ふことになるから、今の文明に於ては人民の幸福を考へる上からも、國家の組織體制と云ふものを鞏固にして、さうしてそれを通して進んで行くと云ふことより外、現代に於ては空想たることを免れぬ。

と云ふことを主張して居るのであります。是に由れば今の文明に於ては國家組織を必要とすると申すので、別に異論の有ることではないが、併し少し思想の缺けて居る所がある。我國の建國の御精神をば打ち忘れ、唯、世界に有り觸れた國家を取つて説明すれば是で充分であるけれども、我が大日本國の建國の御精神、又目的と云ふものは、決して今の文明の程度にて國家を組立てゝ居るのではない。今の文明が進んでも永久に擁護しなければならぬ中心、寧ろ文明の最後迄の力となつて行くものが我帝國の中に存して居ることを確信しなければならぬ。我が御國體は如何　文明が進まうとも、又文明の終極に達するとも、寧ろ其終極の時に於て、我建國の御精神が世界に明かになつて來るのである。今でも建國の御精神の一部分は實現して居るが其大部分は理想として存して居るとは、我御國體を考へれば直ぐ分つて來るのでありますから、穗積博士の説も西洋の思想が

大分影響して居るものと言つて宜い、我建國の御精神から充分考へた思想とは云へないが、前に述べた主權は强力であるとか主權は機關であるとか云ふ思想から見れば、餘程進んで居るのでありまして、今の日本の法律學者の中では所謂愛國的憲法學者でありますが、純粹に建國の御趣意を研究する上から云へば尙足らざる所があると言つて宜からうと思ふ。

(ロ) 皇統一系說

是は普通唱へらるゝ所の說で、文部省側の學者が常に唱ふる所の說である。井上(哲次郎)博士の『國民道德概論』中に論じられて居る國體說は、皇統一系其ものが御國體であると主張して居り、先づ大體に於て日本國民全體が皆さう考へて居るのであり

まして、それは無論間違つて居る事ではないのでありますが、此皇統一系と云ふ事と併せて考へなければならぬ事が段々有るのであります。それで皇統一系說の思想と云ふものはどう云ふものかと云ふことをお話して、それから又他の說を御紹介しようと思ふ。

是は井上博士の『國民道德概論』中の『國體と國民道德』と云ふことを論じた章に出て居るのでありますが、

日本の國體は萬世一系の皇統を以て基礎として成立つて居ります。萬世一系の皇統が其基礎であつて、是に幾多の附屬的特色があります。丁度之を木に譬へまするとと、萬世一系の皇統は根幹の如きものであり、附屬的特色は枝葉果實の如きものであると云ふ具合に、相關聯して國體が出來て居ります

……

是に由れば井上博士の說は、我國の御國體は皇統一系が根幹であつて、それに多くの附屬性の特色が附いて御國體が出來て居ると申すのであります。さうして附屬性と云ふものを七つばかり數へ擧げて居りますが、それは大切の事でありますから、玆に併せて御紹介をして置いた方が宜からうと思ひます。此附屬性と根幹の皇統一系と云ふものとが、關聯して御國體が成立つて居ると云ふ點は大に注意すべき點であります。

第一、『國體と政體との分離』　是は吉田松陰先生が云はれた語にも『世態變遷すとも大義存す』と云ふことがある。日本の世の中の有樣が如何に變つても、我國の在らん限りは、此忠君の大義と云ふものは永久に存して行くと云ふことが『世態變遷すとも大義存す』と云ふ精神であつて、國の政を執る形は時代に依つて變はるもので、我國に於ても王朝の時代と、武家の時代と、それから立憲政治の時代と云ふものは、政治の形は變つて居るけれども、御皇室を戴いて居る御國體と云ふものは少しも變る所がない。然るに歐米の國々に於ては、國體と政體とが常に同一の有樣で顯れて居るから、政體を變更する時分には其國の根本迄も覆へして仕舞ふことになつて居る。我國に於ては政治の組織體制を變更しても、御國體には少しも關係を有つて居らぬことになつて居るのであつて、是が世界に類の無い所の國家の組織であると云ふことを申すのであります。

第二、『忠君愛國の一致』　君に忠なる所以が即ち國を愛する事であり、國を愛する精神が君に忠なる精神に向つて進んで行く

と云ふ事であつて、忠君と愛國とが常に一致して行く。けれども世界の國國の有樣を見ますると、國を愛するが爲めに、時としては君に反抗することがある。國家を思ふが爲めに君主に向つて敵對したと云ふやうの事が歷史の上に澤山顯れて居る。と云ふのは彼等の考へて居る國と云ふものは、個人思想民權思想などが主となつて、個人を基礎として國家を觀て居るからである。所が我國は全然それとは違つて居て、飽く迄も億兆一心の德を明かにし皇運を扶翼し奉ると云ふことが、國民の根本の精神になつて居る。故に『忠君即愛國』で國を思ふの精神は直ちに忠君に向つて顯れると云ふことになつて居り、進んで云へば國と云ふことよりも寧ろ君と云ふことが先になり、君と云ふものが國家より大なりと云ふことになつて居る。

第三、『皇室は國民に先だちて存す』　第二の『忠君即愛國』と云ふ觀念は建國の事情から起つて來て居る事柄で、日本國の建國創業の當時、既に御皇室の力に依つて日本の國は開拓せられたのである。人民は皇祖が開拓せらるゝに從ひ其御聖德に服して段々集つて來たものであつて、人民が國を造つた所へ君主が現れたのではなく、君主の御聖德に依て國が開かれつゝある時に人民が歸依し渴仰して集つて來た者である。例は違ふやうでありますけれども、僧侶や信者が集つて釋迦牟尼佛を作つたのではなく、佛敎、經典、寺院、僧侶、信者等總て皆釋迦牟尼佛が現れて其德化に依て生じた者である。幾ら信者が多くとも如何に僧侶が多くとも其中から釋迦牟尼佛が出て來ないと同じことで、我國の總ての事柄は御皇室の御威德に依て成立つて居る所の

ものである。然るに歐米諸國は之と異つて、人民が國を拵へ居る所へ、或は武力を以て英雄が現れて來て之を奪略し征服して、それに君臨すると云ふ風になつて居るか、若くは人民が相談し合つて誰を戴くと云ふことで、推戴することになつて居るから、奪略推戴と云ふことに依つて、人民より後に君主が現れて居る。故に時に依れば人民の力に依て國が動かされることになりますが、我國は全くそれと違つて居り、御皇室は人民に先たちて成立つて居る。

第四、『祖先崇敬の美風』　是は萬世一系の皇統　祖先崇敬の精神から起つて、祖先の血統を重んずる所から來て居る。其血統を重んずることは祖先を尊敬するからでありまして、祖先の遺志を重んじ、それを實現して行かうと云ふのが本になつて居る

のである。即ち皇祖皇宗の遺訓を大切に思召してそれを遂行遊ばされるのが我御皇室の御仕事となつて居るが故に、國家の大切なる御儀式に於ても總て祖先崇敬と云ふ事と關係して行はせられて居るので、一年中の大祭日などは皆祖先崇敬の御精神又祖先の遺されたる御思召を奉じて、國民の大祭日として居るのでありまして、是は他の國には無い事柄であります。

第五、『家族制度の體系』　是は血統を承け繼いで來ることに於て家族と云ふ精神が成立つて居るので、假令一人でも宜い、日本の家族と云ふものは獨り下宿屋に暮らして居つても、内藤氏なら内藤氏の家と云ふ一種の姓氏がある。諸君中に若し親も無ければ兄弟も無くて、獨りで此學校に通つて居らるゝ方があつても、其一人の身に祖先の家と云ふものが附いて居る。是も亦

他の國には無い。隨て又御皇室の思召の方に遡つて考へまする
と人民は悉く家族の如くに思召して、さうして之を統治遊ばさ
れて居る。御承知の通りに君臣の關係と、同時に父子の如き關
係が、我國に於ては御皇室と人民との間に成立つて居る。故に
人民も御皇室を見奉ること、啻に臣民としての忠誠ばかりでな
く非常に溫き情を以て見奉つて居る。現に先帝陛下御大患の時
に、國民は皆二重橋に集り誠心をこめて御平癒を祈願し奉り、
身命を惜まず晝夜御祈り申上げた者さへあり、又御崩御の時は
皆父母を喪するが如き悲みを抱いて涙にくれたと云ふものは、
權力權威と云ふよりは御仁德の中に、家族的の溫き意味が含ま
れて居る爲めで、斯かる美風と云ふものは他の國に於ては決し
て見ることが出來ないのである。

第六、『君臣の分定まる』　此事の最も能く明かに顯れて居るの
は、御承知の如く和氣清麿の宇佐八幡宮の託宣であります。即
ち『開闢以來君臣之分定矣。以臣爲君未之有也。天之日嗣立皇
緒』と云ふことがありますが、我國は國の開けた始めより君臣の
分と云ふものが明かに定まつて居て、如何なる場合にも臣を以
て君とするとはない。故に武家時代に政治の實權は武門に移つ
ても、決して御稜威をおろそかにするとは出來なかつたのであ
ります。聖德太子の憲法十二條に『國に二君無く民に兩主無し』
とあり、又上宮太子の姫宮の仰せられたとに『天に二日無く國
に二王無し』とあり、中大兄皇子即ち後の天智天皇の仰せられ
たとに『天に雙日無く國に二王無し。此故に天下を……』とあ
る。この『民に二主無し』と云ふ思想は孔子も禮記に『天無二日

民無二主』と云つて居り、佛教の涅槃經の中には『一佛境界無二尊號。一世界中無二轉輪王』とありまして、獨り尊き佛が出て救ひをする場合に、二つの尊き名のものが出て爭ふことはない釋迦牟尼佛と云ふ一の尊き佛がおはせば、阿彌陀とか藥師とか云ふ佛がその世界へ出て渴仰の中心を案る如きことはない、この世界で一番尊き佛は釋迦牟尼佛に極まつて居る。又一世界の中には轉輪王と云ふものは一人しかない、決して二人の轉輪王があるべき筈がないと云ふことである。どうしても物事を統治して行くには其中心が立つて居らなければならぬから、君臣の分定まると云ふことは、理想の國家としては最も必要の事である。支那などもさうなりたかつたけれども、建國の本がさうなつて居らなかつたから、日本の如く君臣の分が明かでないので

あります。……佐藤少將の國防史論鈔中に『聖人孔子をして假に我神州の存在を知らしめたらんには、果して如何なる帝道を祖述せられたであらうか。抑もまた如何なる大歡喜を起し我御國體を賛美せられたであらうか。若しも大聖釋迦をして我日域の人たらしめんには、果して如何なる教義を以て我王法を輔翼せられたであらうか。世界的教法の我王法と融和するを看て如何なる大歡喜を起し常住不滅なる轉輪王の現在し給ふを感嘆したであらうか』と云つてありますが、誠に其通りであらうと思ひます。

第七、『國民の統一體』　是は歴史的に古今を貫いて我國民が統一的事實を擧げ來つたことである。他の國から侵略せられた事もなく、又國民が今迄やり來つた事を根本から革命したともあり

ませぬ。國民の風俗でも習慣でも漸を逐ふて改善せられたと云ふとはありますけれども、國家の組織體が全く破壞せられたと云ふやうな、極端なる歷史を有つて居ないのである。上に皇統一系の御皇室を戴いて居るが如く、國民の方も大和民族の精神と云ふものが、ずつと歷史を逐ふて續いて來て居る。此大和魂と云ふ精神が固まつて、それが破壞されずに持續して來て居るのである。元來日本は雜種の國民混成民族であります。其の混成民族は現在に於ても六通り程あつて、臺灣を領土とし樺太を領分とした爲めに、日本は六種の異民族が御皇室の下に屬して居るのであります。即ち第一は支那人、第二は朝鮮人、第三は生蕃人、第四は「オロッコ」人、第五は「ギリヤーク」人でありまして之に大和民族を合すれば六種となる。さうして此中に中心民族

と云ふものがある。其中心民族なるものは一に天孫民族と稱して、御皇室に直隷し來りたる所の優秀なる人格を有する人民であります。全體の系統から申しますると、日本人の容貌なり骨格なり態度なりが皆違つて居る。けれ共思想の方に於ては非常によく融合されて來て大和魂と云ふものが中心を築いて來て居る。故に異民族と雖も、天孫民族の大和民族に同化されて行く、若し此同化を誤つたら大變な事か出來て國民の統一が破壞される。然るに有史以來國民の統一が破壞されたとはない。今日では西洋の思想が流て來たり、西洋の民族が入込んで來た爲、國民の統一が動搖するとに付、思想界の事を心配するのでありますが、併しそれも一時の現象であつて將來は必ず此統一體を適當に持續して行くに違ひないのであります。

以上七箇の附屬性と皇統一系の根幹とが結び着いて日本と云ふ一の御國體が成立つて居ると申すのが井上博士の說であります。

是等の研究は無論異議を挿むべきものではありませぬけれども、矢張り堂々たる御國體の說明に付ては或重大なるものを逸して居るのであります。それは勿論御皇統に顯れて居る事柄が我國の御國體でありますけれども、此御皇統の中に包含せられて居る御聖德とか御威德とか云ふ靈妙なるものを說明する所に於て缺けて居る。只今述べました所のものは形の上からの說明でありまして、もう一つ眼に見えない玄々微妙なるもの、是は何と申して宜からうか『靈德』と謂ひ『俊德』と謂ひ樣々の意味で顯して居りまするが、一種不可思議の力が御皇統に合して居

る意味合を十分研究しなければならぬ。それは後の說を紹介致しますれば其結果が自然明かになつて參りますから玆に精しくは說明致しませぬ。

(八) 世界總攬說

此題名は假に私が付けたものでありますから、果して當つて居るかどうか分りませぬが、此說の主唱者は筧(克彥)博士でありまして、『古神道の性質』と云ふ論文中に於て論じられて居るものであります。尙『古神道の大義』と云ふ書を著はされたさうでありまして、私は未だそれを見ませぬが、大體『古神道の性質』と同じ趣意と思つて其論文から御紹介致します。

我國の神ながらの道……是は『古神道』とも申せば『皇道』とも申

し、或は『惟神の道』或は『臣道』或は『敷島の道』或は『大和の道』と云ふやうに色々の名を付けて居りますが、我國の建國當時から存在して居つた理想を指すのであります。之を『神道』と云へば何やら狹隘に考へられて却て迷が起りますから、私は『皇道』と申すが宜いと思つて居ります。故に筧博士の言はれる『古神道』と云ふのは即ち『皇道』であると御承知が願ひたい。

此皇道の精神は、凝り固まつて動かないやうな意味合のものではない。非常に發展進取して行く所の活きた意味を有つて居るものであるから、國家を中心にして、居ながらにして世界と融和して行く妙體を有つて居るものである。丁度國民が一の國に屬して居りながら、世界の文明と衝突しないやうなものである。それで此古神道即ち皇道の精神は皇道其自身で

色々の事をしないで宜い、有らゆる教を總攬して行くに付ては、佛教は佛教をして改善せしめて行けばよし、基督教は基督教をして改善せしめて行つたらよい。是が古來より我國の皇道に於て取り來つた所の大方針であつて決して妄りに手を下さない。併し乍ら古神道と云ふものを窮屈に考へて、佛教でも基督教でも是等を排斥し樣と云ふやうの考が起つたら非常の間違で、斯かる世界的に堂々と進んで來た進歩した宗教を排斥しようと思ふやうな者があつたら大なる誤解であるのみならず、そんな事は全然不可能に終はる、さうして更に進んで考へると我國の皇道には國民的の方面と世界的の方面とが揃ふて居る。即ち葦原の中津國(日本國)と云ふものは只出發點に付て之を中津國と定め給うたけれども、實

は全世界に及ぼす中心としてお立てになつたに違ひない。我日本國に實現して居る此國民精神を以て世界に推し及ぼして行き、世界人類をして一心統一の平和の生活を營ましめる所まで伸びて行くのが我皇道の意義である。さうして人類全般を漏れなく救濟する所迄進んで行かなければならぬ。世界に類無き御皇室を戴いて居るのは今の日本民族のみの私すべきものではない。我御皇室は世界的の中心にお立ちになる御威德があるので、即ち日本民族は世界の表現者として此世界の平和を維持する爲に、こゝに結合を取つて居るのであつて、世界の爲めに日本は存して居るのである。故に日本民族の内輪のみの爲に私を計るやうの卑しき料簡は毛頭有つてはならぬ、就ては日本民族の大自覺をなさなければならぬ事

があるが、それは即ち上にお立ちになる御方は、世界の人民に對して仁愛の惠を與ふると云ふことを御考へ遊ばされて、下たる人民は世界の總攬者で在らせらるゝ御方に對して忠義を盡して行くのである。唯、我國の御方であると云ふ爲に忠義を盡して行くのではない(こゝが他の說とは餘程違つて一頭地を拔いて居る所であります)、又御皇室の御德は『普遍我』(宇宙の靈力神明)と云ふ宇宙大なる統一的意味のものと合體して居り、そこから出て寬仁大度の人格を有せられて居る非常に汎い所の、即ち宏汎なる愛と敬とを有せらるゝ所の主體であつて、語を換へて言へば世界全體を統治する所の天皇でいらせられる。此尊き御方を戴いて世界的表現者として一の結合を取つて居るのが日本民族である。故に我々忠義の

心を君に捧ぐるのは世界の總攬者を今の日本の國民に依て翼賛し奉つて居ると云ふことを忘れてはならぬ云々

是が筧博士の説の意味の大體でありますが、此中『普遍我』と云ふことを申して居る所が、皇統一系説よりも或意味に於て深い所に入つて居る思想でありまして、此説の如きに至ては私共の考に於ては一言も申す所なく批評を加へる所がありませぬ。洵に能く思想の整うて居る説であると思ふのであります。尚此思想と同一方向に進んで居る説が澤山ありますが次に御紹介すべきは『靈德理想説』であります。

(二) 靈德理想説

是は姉崎博士の『宗教と教育』と云ふ近著の中に擧げられて居

り色々の方面に亘つて詳密に論じて居られますが、中に就き必要と思ふ點だけを抜いて申述べます。

姉崎博士の説は皇統一系の意味合と、宇宙的靈德とは完全なる思想として、併せてこゝに考へなければならぬと申して居ります。即ち此皇統一系と云ふことの上に宇宙大の靈德が合して一致して行くと云ふことを、體と用との二字を以て説明して居るのであります。

- 體
  - 事前の理
  - 久遠の法
  - 宇宙的靈德
- 用
  - 皇統一系
  - 億兆一心

建國の當時自然に現れた事前の理、即ち靈妙なる意味合のものと、久遠の法と、宇宙的の靈德とが『體』となつて、皇統一系、億兆一心の『用』が顯れて居ると云ふのである。此『體』と『用』とは天台大師が法華經を論じた時に『名體宗用敎』と云ふことを言はれた其語から取られたのであります。

『天壤無窮の寶祚萬世一系の皇統　是は國體の要素には相違ないが國體の實體ではなく實體の發現である。皇統の無疆とは國體と云ふ大本の因より出た結果で、皇室の御稜威は其力の發表である。國體の體とは是等發表作用の凡ての源となり大本となつて居る靈德で、此靈德は根本の事實、久遠の法、事前の理である。天地化育の德は天人統治の威嚴恩德となつて天祖の御神靈に現れた、是れが國體の大本である』

此宇宙大の靈德が日本の御皇室に顯れて、そこに國體の大本が定まつて居るのであると云ふ意味であります。併し茲に注意しなければならぬのは『體』と『用』との意義でありますが、私共の方では『用』は『ゆう』と讀んで居るのでありまして、此『體用不二』と云ふことは餘程よく考へ合はせなければならぬ。法華經の講義の場合などには、法華經の實體は宇宙の眞理であると云ふことと本佛即ち釋迦牟尼は作用であると云ふことに付き、此體と用との關係は頗るやかましき問題となつて居ります。段々議論が進んで『體用不二』は之を一方から云へば『法佛不二』と云ふ思想に於て顯れて來る。それから又佛の說明をする時分には『法身應身不二』と云ひ、『法身』は眞理の本體にして始無く終無く續いて居るものであるが、それが必要に應じて救ひの爲めに顯れ

て來るのが『應身』であります。故に應身は隱れたり顯れたりするが、法身は無始無終で存在して居ると云ふのであります。丁度さう云ふやうな具合に無限の靈德は萬世一系の御皇統と『體用不二』の關係を成して、萬世不易の皇統の上に不滅の靈德が續いて居るのでありまして、御歷代の天子樣は恰も應身の作用のやうに顯れてござるのである。此『體用不二』の關係を十分に會得することは最も大切なる事柄であらうと思ひます。

(ホ) 靈氣不可侵說

是も私が當嵌めた文字でありまして、小笠原子爵にお目に懸かつて御說を承はつてからにすれば宜いのでありますが、假に斯う名づけて置きます。若し後に御小言が出たら訂正致します

此說は何か詳しく書かれたものがあるか分りませぬが、佐藤少

將の著國防史論の上卷に『日蓮上人の國家觀に就て友人某に答ふ』と云ふ書翰中に於て論ぜられて居る所を見ますると左の如きことを云つて居られます。

上行の出現すべき國相は神聖不可侵の靈氣を有し、卷いては世界道義の中心となり、舒へては統一的に宇宙を靈化するに足るべき者ならざる可らず、之を是れ法華經有緣の國土とも申すなれ、嗚呼此不可侵の靈氣即ち相對の諸力を超絕したる大威力の實在は、申すも惶こけれど天成の神統を垂れて之を無窮に傳へ給へる大日本國の御稜威ならで世界何處にか求め得べき

是は一種の神聖侵すべからざる靈氣があるが、それは宇宙の靈氣であつて、縮めては世界道義の中心となり道德の生命となつ

て人類間に顯れて來る、又之を擴げたならば天地宇宙に磅礴して行く所の天地正大の氣である。其力が我御國體に顯れて來て居るものである。それが我國の御稜威となつて顯れて來たものである。故に我國の御皇室の力は相對的の力を超絶して居る。即ち富の力、德の力、兵の力、知識の力と云ふやうな色々の力を皆超越して、何者と雖も侵すことが出來ない何者も對抗することの出來ない所の無限の靈力を顯して來たものである。それが我國の御國體となつて、無論御皇室に一致して顯れて居るのである。

(へ) 君臣感合說

是は井上(圓了)博士が主張せられて居るのであります。『國體及

忠孝ヲ論ス』と云ふ論文に依て發表されて居るのでありますが井上博士は我國の御國體の意味を客觀と主觀とに分けて說明して居られます。

- 客觀
  - 物界
    - 氣候(温帶)
    - 地味(豐沃)
    - 風景(秀麗)
  - 人界〜萬世一系の皇統
- 主觀
  - 心界
    - 一種の靈氣
    - 大和魂
  - 外界
    - 神聖の國風
    - 光輝ある歷史

即ち客觀の物界に於ては氣候溫帶にして地味豐沃、風景秀麗であると云ふやうの自然の天幸があり、人界の方に於ては萬世一系の皇統を戴いて居る、斯くして世界無比の御國體が顯れて居る。又主觀の心界に於ては一種の靈氣が凝つて大和魂なるものを起して居り、外界に於ては神聖なる國風を有し、國の風俗習慣が光輝ある歷史を作つて居る。斯う云ふ具合に天然の方には秀麗なる所あり、人界には御皇室を戴き、心界に於ては國民の性質が大和魂を有し、外界には一種の神聖なる國風光輝ある歷史を作つて居り、此全體が集つて、君臣感合し、天皇の大御心と億兆一心の忠愛の心が感合して、我國の成立の本となつて居ると云ふ說でありまして、詩文の證明としては藤田東湖先生の正氣の歌及會澤正志先生の新論を引いて、『宇宙純粹の氣こゝに

並び行はるゝもので、權威と慈愛の關係の二つの結晶したものであると云つて宜い。故に今迄無宗教者のやうに考へた武士達が神州由來正氣在りと言つた所の此正氣は、道德性で權威と慈愛と具備したものである。これを推し究めて見れば圓慈觀と同じであるが、たゞそれが不透明であるから正大の氣と云へば活き〳〵した武士らしく考へられるが、宇宙には大人格の佛樣が在ると云ふと抹香臭いやうに考へられたのであつて、そこは日本の文明が少し後れて居るのであります。さう云ふ具合に儒者の側から正大の氣と云ふことを尊んだが、尊き神樣や佛樣が居らせられると云ふことを顧みないことになつたのは、宋儒以下の儒者の思想に入つたからであります。けれども確かりとこれを認めなければ我御國體の淵源は明かになりませぬ。儒教の本義を考へても天道とか明德とか云ふことには、明かに人格的の意味を認めなければならぬ。本統に推し究むれば儒教でも御國體

の上でも佛教でも人格實在を認め、圓理よりは圓慈に向つて進むやうになるのである。これはどこ迄も日本として將來に向つて研究を進めて行く必要があると思ひます。

(5) 佛教の教義　唯今申した宇宙法界と云ふものと、それから佛と衆生と此三つのものに於て、其眞實の有樣を說明する所に於て教と云ふものがある。即ち自然の狀態を教へる自然法は宇宙と佛陀と衆生の三つのものであります。此眞相を說明し即ち妙法を說明し、而して此三者の間の關係を說き、妙法と人生との關係を說明しさうして吾人をして向上の道を進ましむる所に佛教の行法と云ふものが生じて來るのであります。

これが佛教の教義であるが、これを說き分けると云ふと非常に澤山の意味に說明されて、幾つに分れて居るか殆んど分類の出來ない程に分れて居ります。併し其無量義に分れた者を開顯してすつかり其疏通を計つて、こゝに統一法を說明したものが佛

教の教義であります。故に佛教を學ぶならば此自然の狀態なり我々の實行方法なりを教へた所の、分裂した教義の無量義の一部に拘泥してはならぬ。其總てを開顯して統一的歸着點に達するやうにしなければならぬので、それが佛教教義の大觀であります。

何が一番重いかと云ふと佛と吾人との間の關係でありまして、これが又二つに分れて必然的の關係と精神的の關係となる。必然的の關係は放擲して置いても關係がある。何となれば實相より來て居るのでありますから、眠つて居ても醉つぱらつて居つても、全體を同じうして居る所がある。普遍我と云へば醉漢でも惡を犯して居つても普遍我でありますが、さう云う必然的に尊いものであると云ふだけでは、宗教と云ふものゝ用を爲さぬのである。舜何人ぞ我何人ぞと云ひ或は王侯將相何ぞ種あらんと云ふやうなことを言つて見ても、そんな事は何にもならぬ。實

際に於てはそこに違ひが生じて居る。一方は法性的に現れて居るが他方は無明的に現れて居るから、無明を段々辿つて居つたら憐れなものであります。そこで必然の關係から進んで精神の關係を見るのであつて、佛が救濟の慈悲を發し、我々は向上努力の道を辿ると云ふ此間の接觸を見て行くのである。國家の上で考へても矢張り其通りで、君主と人民との關係が一面には離れない關係が必然的に固よりあります。國の成立の上からさう云ふ關係がありますけれども、そこに活きた精神が上からも降り下からも昇つて行かなければならぬので、上から降る大御心と、下から昇る億兆一心の精神と合致して、こゝに活き〳〵として發動して居るものがなければならぬ。現に活きた國民に億兆一心の精神が、ちやんと力を顯して居らなければならぬのである。それと同じく宇宙の問題も佛に慈愛の力がなければならぬが、我々は亦渴仰信仰の力が活き〳〵した生命を以て働いて

居らなければならぬと云ふことを申すので、そこが佛教の教義の最も大切なる所であります。さうすると云ふと此間に結合を生じ、佛と衆生との關係から色々と尊き信仰の効果と云ふものが顯れて來るのであります。

(6) 行法　行法も色々に分れて居りますが大事な所は菩薩行と云ふものが着眼點である。佛教の行法は菩薩でなければ用ゐないと云ふとは日本では聖德太子の時から極まつて居る。小乘の教は我國には入るべからずと最初から極つて居つた位で、大乘の教を本としたのである。然るに獨善主義未來主義と云ふやうなものが起つたのは其方向を誤つたもので、それは時代思潮に驅られた爲めで、國家戰亂の影響を受けて國民思想がさう云ふ風になつたので、佛教が國民化し日本化する場合に惡くなつたのである。佛教が祈禱主義に變はり或は厭世主義に變はつたのは、印度にもさう云ふことがあつたか分りませぬけれども、釋

迦牟尼の說いた佛敎はそんな不完全なものでなく、單に現實を主張し厭世を主張した者ではありませぬ。釋迦牟尼の婆羅門を攻擊して起つた佛敎建設の際の事柄が、そんな幼稚のものではありませぬ。一方に婆羅門があつて未來觀に陷つて恒河に身を投ずるのを見て、そんなつまらぬ事はない、己の精神の修養を積まず、道德をも修めずたゞ未來の思想に依て神に縋るのは不都合極まると云ふとは釋迦牟尼が最初から說いた所である。故に佛陀の敎を說く初めに既に極まつて居ることであるのに、悲觀的に變はつたり現實思想に變はつたのは、日本の國民にさう云ふ思想があつた爲め高遠の理を引下げて、厭世主義又は現實主義に變化せしめたのであつて、畢竟國民がさう云ふ風にしたのであります。今でも日本の宗敎家が惡いと云ふ批評はありますけれども、東京邊の人が川崎の大師樣を拜むとか、羽根田の穴守稻荷を拜むとか、又は品川の荒神樣を拜むとか云ふのは、

釋迦牟尼がさう敎へたとではないが、東京邊の人々が滔々としてそれに赴くのである。さすれば宗敎家が惡いと云ふよりも實は國民がさう云ふ風になつて行くのが惡いのであります。日本の文明、思想界、宗敎界の問題に就ては敎育家も政治家も學者も皆責任を負はなければならぬので、宗敎家が惡いとか誰が惡いとか云つて攻擊するのは、日本の建全なる思想の發達を思はず國民が宗敎心に於て幼稚なるがためでありまして、此點に於て着想することが最も必要であると思ふ。さう云ふ弊害を生じたのは佛敎の行ではありませぬ。佛敎の行は菩薩行が說いてあり其行には色々ありますけれど大體に於て『自利、利他』と云ふのである。自己が信仰に依て平和滿足の精神生活を營み又他に對しても自分の信仰に依て之を導て行き、或は色々の善根を積んで社會事業救濟事業をやつて行くことである。日本に佛敎が渡つた時を考へても、聖德太子が佛敎を奉じた時分にも御祈禱

主義を尊重したものではありませぬ。鎭護國家と云つて國家を護るものであるとは考へて居たが、迷信的でもなければ未來主義でもありませぬ。三寶に歸せずんば何を以てか狂れるを直さんと云はれて、道德的に國民の精神の健全を圖ることに努められたので一方には天王寺を開き、療病院施藥院を開いて社會事業を盛に鼓吹したのである。又祈禱主義も宗教の健全なる即ち穩健なる意義に於て、聖德太子が主張せられたとは誰でも知つて居る。それが癖付いて厭世主義祈禱主義の流行して來たのは宗教家の罪もあらうが、國民がそれに傾いて來たからであります。一人や二人さう云ふ宗教家が出ても國民がそれを迎へなければそんな主義は行はれて來ないのである。今でも宗教の見地が明にならぬのは國民の罪であつて、宗教家も亦國民であります。して見れば優れた良い宗教家の出ないのは國民の罪である。宗教家が山から生れ地から湧き出る者であつたら兎も角、然ら

ざれば良い宗教家の出ないのは、國民が宗教に對する觀念を誤つて居るからである。故に最初から自利利他の菩薩行は日本に起るべき運命を有つて居つたのであるが、日本國民が病ひ付いた爲に長い間其眞相が覆はれて、病的狀態となつて居つたのであります。所が段々立派な高僧が出て傳教大師も菩薩行を養成しなければならぬと云ふことを、盛に主張し又た弘法大師なども日本の文明に貢獻し、菩薩行を積まれたのである。又日蓮上人の如きに至つても大菩薩の行を積まれて、有らゆる道德上の働きにつきては忠君愛國のことにせよ、其の他の道德行爲にもせよ、總て日本の文明を豐富にするために働いて居るのであります。お經にある觀世音菩薩よりも文殊菩薩よりも日本に實際に現した傳教大師、弘法大師、日蓮上人の方が餘程えらいのであります。文殊菩薩はえらいと云つても理屈のみを說いて居る又觀音樣はやさしいやうでありますけれども、慈愛過ぎて何

でも宜しいと云ふやうな風がある。所が日蓮上人は哲學も道德もやつて文殊菩薩のやうに偏寄たものでもなければ、又觀世音菩薩のやうに偏寄たものでもない餘程尊い大菩薩であります。日本に生れた大菩薩であつたことを皆忘れて居るのである。佛教を研究するものは菩薩行を必ずやらなければならぬことになつて居る。先づ以て菩薩行の注意としてはどう云ふことが言つてあるかと云ふと如來衣、如來座、如來室と云つて、佛教の教に從ふ者は如來の衣を着て、如來の座に坐し、如來の室に居れと云ふことがある。如來の衣と云ふのは忍辱の衣であつて、百折不撓の勇氣の精神を忍辱鎧と云ひ、どんな困難なる仕事でも屈せずに爲し遂げて行くのが忍辱の心である。又た如來座と云ふのは法空とも云ふが今日の語で云へば公平無私の心、公明正大の精神であるが、そこを自分の坐する處としなければならぬ。又如來室と云ふのは慈悲を以て室となすので、我々の心に慈悲

の心が動けばそこが如來の室であります。故に如來の室に入らんとすれば遠方に行くに及ばない、自分の心に慈悲心を起せば如來と俱に其室に入るとが出來るのである。此等の事も大切であるが菩薩行と云ふものは面倒の事ばかりやるのではない。精神的修養の大事な行をやつて行くのが菩薩行である。或は六波羅密の行として說いてあるがそれも六ケ敷事でない、極端に云へばむづかしくなるが、例へば施の行をする場合には布施の三施即ち財施、法施、無畏施と云ふことを說いてある。救濟慈愛の精神を人各行はなければならぬから各自の分に應じて社會救濟事業をやらなければならぬのである。日本は勿論他の國でも救濟事業は大事の問題となつて居る。要するに多少でも資產や地位がある者は財施をしなければならぬ。社會共同生存に於ける財施が發達しなければ完全の文明は顯れて來ない。それから法施と云ふのは或は講演會を開き、或は著述をして國民を導く

とか道を教へてやると云ふやうなとで、金錢物品を以ては施さないが知識技藝を以て施してやることであります。又無畏施と云ふのはさう云ふやうにやつても、人生意の如くならぬこと多く、一方に地位を得ると何か病氣が起るとか即ち盈つれば虧くる所が出來る、人生は決して完全とは云へぬ。大きな理想信念に活きれば疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げてこれを枕とするも樂亦其中に在る譯である。如何なる不愉快の立場に居つても偉大の道德信念に活きたるときは、そこに安ずる所があつて如何なる事に遭遇するも畏るゝことなく、何時も平和の心に滿ちて居るやうに生きて行くことであつて、これも國民は皆さう云ふ考を有つて居なければならぬ。一日の長ある者は皆無畏施をやつて行くやうにせねばならぬ。それがこの點に於ては日本人は劣つて居る。先輩の人がお前は精神上にどう云ふ平和滿足を受けて居るかを問もせず、又此方から問ふてもそんなむづかしい

ことは、今急に言ふことは出來ぬ、お前ばかりでなく此方も尙畏れて居ると云つて居る。それでは健全になる譯がない、先づ以て人間の心がぶらついて居り心配して居るのを導いて、恰も獅子が百獸の中にあつて畏れざるやうに、一切やつて行かうと云ふのが無畏施の行である。布施の行と云へば坊主に何か食はせるのが布施の行であるやうに考へるのは死んだ考で、活きた考ではさう云ふことではならぬ。今日の有樣は社會事業をやるべき者は財施を忘れ、宗教家や學者は法施を忘れて居るやうに見えるが人各〻此三つの施を理想して居らなければならぬ。此三施は菩薩行の一部であつて普通六度と云つて六つある。結局菩薩行の結論と云ふものは、どう云ふ風になつて居るかと云へば不放逸と云ふとであります。今日の如く放縱の生活自墮落の生活をやらぬで、一の理想を立てゝそれを仕上げる迄は屈せず撓まずやつて行かなければならぬので、一方から云へば精進で

ある。又軍人で云へば勇往邁進とか奮鬪とか云ふ力を存することであります。さうして斯う云ふやうな事柄即ち道德性の事柄が澤山にあります。それを結んで見ると一信一誠である。これが貫いて色々な美しい働きが現れて來る。此信仰を養ひ此效果が現れて社會を益することを以て佛敎の行法として居るのであります。坐禪をするとか南無阿彌陀佛を唱ふるとか云ふことなどは、それは精神の置き處を定むる一の形式であつて、これより進んで社會國家に貢獻して行かなければ何にもならぬ。各人が精神を鍛へ上げて、それが光となつて世の中に發現して效果を生じて行くことについて、佛敎は菩薩行と云ふことを奬勵するのである。

(7) 佛敎の效果　佛敎は我國なり若くは世界に對して將來どう云ふ效果を現すかと考へまするとなか〳〵多大な使命を帶び

て居るものと思ひます。

第一は哲學上の事について佛敎の位置は非常に尊いものである。世界の哲學中にても佛敎哲學は前にも述べた如く實相上の眞理から取つて、人格實在の佛陀を建設して居ることに於ては最も優れて居る。西洋の進んだ哲學者が時々さう云ふことを論ずるが西洋ではまだ一人〳〵の一家言となつて居つて、宗敎となつて居らぬ。たゞ佛敎に似た事を卓識の人が言ふだけであります。佛敎は長き歷史を經てよく整ふて居り、それが東洋の文明殊に日本の文明として消化されて居りますから、哲學上から云つても東洋哲學に貢獻し、進んで世界の哲學上に於て尊き位地を占めて居るのである。又哲學は何ものにも大關係があつて實際の事はそれ〳〵分れて居つても、根本は皆哲學の根據に依らなければならぬ。今後思想が色々の創作に進んで行つても取り止めた所は哲學の根據に依らなければならぬ。家を建てるに

も礎を堅固にした後に建てなければ大廈は建てられぬし、又橋杭を打込むにもどん〳〵と見えぬ位まで打込まなければ、橋を架することは出來ぬのである。橋上を通る人は知らずに通つても橋杭が確つかりして居らぬと、重い物を載せた車でも通るとぐら付いて來るのであつて、其基礎の大切なることは言ふまでもありませぬ。東洋の文明に於て其基礎は何であるかと云ふと佛教を措いて他にあらずと斷言するに憚らぬのであります。

第二に道德上に於てはどうであるかと云ふと、我國に於ても特殊の道德がありまするし又儒教にも現れて居りますから佛教の專有すべきものではありませぬが、佛教が道德の根柢を哲學上から與へて行くことは、丁度儒教の天道明德を說明する根據となり又日本の御國體の根據を明かにし、翼賛して居る者である。天來の皇統或は神勅の意味を、他の科學や儒教や哲學に依て窺ふよりも、佛教の教義に依て此深遠の意味を窺ひまするとと

一層明かに日本の建國の事柄などが分り、且確乎たる意味が顯れて來るのである。其事實は建國の時より存するが其意義を人々に納得させる說明の法則としては、佛教の說明式を參考とすることが最も好都合であつて、又それが道德の實行力となるのであります。道德は知つてもそれを實行する力は容易に現れて來ないもので例へば忠愛の觀念があつても、それを實際に行ふ力と云ふものはなか〳〵出て來ないものである。所が宗教の信仰と云ふものが加はると人が眞面目になるのであります。元來『一誠』と云ふことは頗る宗教性のものであつて、道德と云ふても一誠と云ふものが根柢で、實行力の源であつて頗る宗教性のものである。眞に一誠と云ふことを尊崇したら其人は宗教の信仰を侮ることは出來ませぬ。今迄儒者が宗教の信仰を侮つたのは一誠と云ふことを眞に諦めて居らぬからである。一誠は天地を貫くもので、先帝陛下の『眼に見えぬ神の心に通ふこそ人の

心の誠なりけれ』と仰せられた御製の如く、誠の心があつたら必ず神様に通ふと云ふ所謂絶對位に對し、天地に對し俯仰して恥ぢずと云ふ心が起つて來るのであるから、頗る宗教的のもので一面から云へば宗教であります。其實行力を生み出す信仰はどうしても日本の文明の上から考へれば、佛教を透して來る者である。惟神の道も形式上には宗教の色彩を帶びて居るが、色々と人間を說明し、感化する法式としては佛教の樣に道具立が揃ふて居らぬとうまく行かぬ。それについては佛教が非常に宜い。儒教の道德實行力も、學問をして行く人間には宜いけれども無學の人間にはちつと分り難い所もあり、まだよくこなれて居らぬ所がある。愚夫愚婦を感化し善導する法式が十分發達して居らぬ。儒教から出た心學道話のやうなものがあるが洽く感化する力を有つて居らぬ。成る程儒教は武士の間には傳はつたが佛教が一般人民に傳道し教化したやうには行はれて居らぬ。

顏淵が陋巷にあつて肱を曲げて枕としても、其中に樂みを感じたと云ふが、それは法悅の生活に入つたものでさう云ふことは宗教の精神があつたら誰にでも出來る。顏淵一人それが出來て他の三千の弟子がそれが出來なかつたと云ふのは、儒教の教化であつたからであります。宗教の信仰で云へば陋巷にあつて肱を枕として樂む位のことは誰にでも出來る。納豆賣を連れて來ても顏回以上のことが幾らでも出來るので、そこが宗教が實際の力を動かす所であつて、これを否定することは出來ぬ。東西と云はず古今と云はず、宗教的信仰の感化に依て道德の實行力を得て居ることは爭ふべからざる事實で、此點に於て佛教の社會に與ふる效果は永久滅びざるものであります。

第三に美術に於ても、東洋の古代美術は皆佛教の影響を受けて居る。今尙美術を觀察すると佛教の尊い點が澤山顯れて居ります。之を美化した美の神に接しなければ決して美の妙處に達す

ることは出來ませぬ。佛教は美の實在美の生命を説明して居るものである。さう云ふ事は儒教の中には見えて居りませぬ。どうしても宗教の信仰が加はつて美の實在性を帶びて、それに信仰が入つて來なければ本統の美の極致に達することは出來ぬ。繪に畫いた馬が躍り出すとか、左甚五郎の作つた兎が月夜に飛出して波の上を走つたと云ふやうなことは、餘り極端に云へば信じられないやうでありますけれども、生命が入つて活躍すると云ふやうなものは宗教の信仰を有する所から來るので、さう云ふものが眞の美術に於て發展するのであります。

第四に政治上に於ても、今日では憲法政治であつて、これは結構の事に違ひないけれども、政治の本體と云ふものは矢張り道德であるから、宗教の信仰のやうなものが根據になければなりませぬ。如何に權利關係を說いても、根本の道德の精神宗教の信仰のやうなものが衰へて來たら、幾ら巧みにやつても第二流の政

治家としか思はれぬのであります。永久に政治の根本となるものは道義信念であつて、一方に政治を進むると共に一方に益〻宗教の高潔なる信仰を進めて行かなければならぬ。昔から大政治家と云はれた者を觀察すると、其半面には道德宗教を握つて居る。然るに道德宗教を棄てゝ單に政治學の方面のみから來た人に大政治家と云ふ者があるべき筈がない。現今の政治の有樣を見れば一方に益〻佛教の高潔なる信仰を皷吹する必要があります。又經濟との關係も矢張りさうでありまして經濟と道德とは相離るべからざるとは言ふまでもない。併しこれを道德などとむづかしく云はぬでも、經濟を專らやる商人或は其他の實業家の間に宗教の信仰が入れば、欺くとか不正の事は無くなつて勤勞の精神も起り、正直にして勤勞に勵めば經濟の振興することは勿論である。然るに勤勞せずして人を欺いても利益を得んとする者の多いのは、根本の道德心が衰へて居るからで、それ

では迚も經濟の發展は覺束ないのである。經濟の發展を計るには一方にどうしても道德宗教を尊重しなければならぬ。たゞ金が大事であると云ふ風に進んで行くのは此位愚なことはない。百年の富貴一朝の塵と云ふやうな譬もあつて、其根本精神が確かりして居らなければ金などは忽ち散じてしまふのである。總て人生の生活には衣食住の經濟が大切である。けれども其衣食住は人各〻滿足の出來るものでないのであつて、限りある物を以つて限りなき人間の慾望に對するときは、必ずそこに不足を感ずるのである。例へば煙草を吸ふ力のない者はどんな煙草でも吸ひたいと思ふが、刻煙草が吸へるやうになれば卷煙草が吸ひたくなり又卷煙草が吸へるやうになれば朝日から大和、敷島と云ふやうに進んで、遂には一本五拾錢も一圓もする葉卷を吸ひたくなるのであつて、斯う云ふ贅澤なものを一年も吸つて居つたら今度は一本五錢や三錢のものは吸へなくなります。其の通

り生活上の慾望は限りがない。尤も生活上の慾望は抑へぬが宜いと云ふ議論もありますが。私の考では人間の慾望は程好く進めば宜い、自分の生活と社會の狀態と正比例に進むは宜いが慾望の方が駈足で進むとそこに弊害が起る。馬は手綱を抑へても駈出したがるのに、頻りに其尻を叩いたならば益〻駈けるのでありませう。故に此信仰が手綱ともなり不足を慰めて吳れるのである。日蓮上人が『女房と酒打ち呑んで南無妙法蓮華經』と云はれた樣に豆腐一丁で酒を飲んでも趣味を感ずる。人間は心の合つた同士が寄つて鹽煎餅を嚙つても、久し振で會つて親しく語れば、非常な御馳走を食べるよりも愉快であつて精神的に滿足して、其足らざる所を補ふことが出來るのである。人生一般に精神的に滿足するには、どうしても宗教の信仰が加はつて行かなければならぬので、これも動かない所の眞理であります。人生の生活を完全にするには經濟の關係政治の機關も必要で

ありますけれども、どうしても人間の精神の信仰の慰安を根據として進んで行かなければならぬ。如何に生活狀態が進んでも政治機關が發達しても國民の宗教的信仰の慰安がなければ益、人心に不平が起らうと思ひます。我々の考ふる所では佛教はさう云ふ點にも效果があると思ひます。

御國體を擁護し奉る點に於ても勿論、又人道正義を發揚する上に於ても佛教の信仰は大切なことゝ思ふ。自分が考ふる所では世界の文明を導いて行く上に於て、第一日本に於て東西の文明が接觸するに當り、これを消化し然る後これを同化するには哲學の眞理佛教の信仰のやうなものゝ力に依らなければ、迚も同化することは出來ませぬ。たゞ在來の道德、歷史の因緣にのみよるやうな思想を以て西洋の文明、宗教、道德に對抗して行つたならば、日本の思想文明は動搖するであらうと存じます。今日では既に思想の健全なる人々が、教育の方面から種々と心配

をして居りますが、實行は十分でなくまだ〳〵樂觀することは出來ませぬ。思想の動搖は年々に進んで迚も安心することは出來ないであらうと思ふ。尙ほこれから三年五年の間は諸君が其實況を見られるでありませうが、思想の動搖は益〻進んでなか〳〵安心が出來ぬと云ふことは、私が豫言者として申して置きますが、必ず大に額を鳩めて國を思ふ志士の間に大に論ぜらるゝことがあらうと思ひます。又必ず其の時に佛教に着想する人が現るゝであらうと思ひます。

二、佛教の日本化

(1) 日本國と佛教　日本國と佛教とはどう云ふ關係があるかと申しますと、一言にして云へば理想的に於て一致して居るものであると斷言したいのである。日本の有つて居る理想目的と佛教の有つて居る理想目的とは全然一致して居るものであつて、日本の理想目的を明かにするものは、佛教の理想目的を明かに

するものであるし、佛教の理想目的を明かにすることは日本の理想の目的を明かにするものであります。國と云ひ法と云ふ名は異つて居るが、內容の理想目的は、全然變はらないものと云つて宜い。これは深く日本の國を研究し又佛教の教を研究したならば確かにさうであると云ふことを、お認めになるに相違ないのである。

それを簡單に一言しますれば、日本の國家と云ふものは國家を透して世界大の大理想を發現するのであつて、即ち其理想は天業である。天地の間にある大理想を代表し日本の國が世界にそれを顯して行くのである。此天業天地の間にある本來の意義と云ふものを日本が顯して行くことになると、佛教の考へて居る所もそれである。たゞ佛教は宗教と云ふ名に依て認められて居る。矢張り世界的に現れては居るけれども、國の意味を尊重し國に從つて適當に其教を顯して行くのでありますから、宇宙の

妙法をば佛が國王に附屬して、國王の力と相待つて教が發現して行くことになつて居る。どちらも人生に慈愛を與へ人生を救濟せんとするものであつて、現れに於て佛教は慈悲感化を表にして居るが裏には折伏と云ふことがあり、日本國は威力を表にして居るが其裏面には慈愛がある。故によく研究すれば佛教の理想は國家の理想と異つたものでない。偏した者が考へるから國家主義者は宗教を問はず、宗教側に立つた者は國家の事を問はぬと云ふ風に考へて來て居るが、それは非常な間違である。元來國と教との間には本來の一致と云ふものがある。即ち理想目的に於て日本國と佛教と離れられない者があります。佛教が日本に適合し日本が佛教に適合して居るのである。又兩者が讓り合つて融合した點もある。佛教が日本に合はぬ所を改め又日本の風俗習慣の悪い所は矯めて、兩方から融合した點もあります。佛教に依て色々日本の風俗習慣が變はつて佛教化したこと

も澤山擧ぐることが出來る。建築、言語、習慣に於てそれを見ることが出來るのであつて、日本人の血の中には佛教が入つて居り氣風が皆さうなつて居る。

それから一方には佛教の日本化と云ふことがあります。佛教の日本化については佛教の惡い所を攻擊する人もあるが、それは其時と處とに當嵌まつて居らぬ所があるからで、佛教其ものはなか〳〵粗末のものでなく、日本國民が皆手を合はせて拜んで宜い偉大の教である。然らば佛教が日本の國に同化して行くと云ふ點はどう云ふ點であるかと云へば第一は國家的に明かになつて行くことである。佛教が非國家的のもので世界的であつたのを無理に國家的にしたのでなく、佛教には國家的の所があつてそれが明かになつて行くことであります。殊に國家的に於て尊王主義となつて現れ、同時に敬神思想となつて現れて來て居る。それから色々と現實的に現れて來て現實に調和するやう

になつて居る。即ち國家的尊王的敬神的現實的に現れて日本の佛教に特色を發揮するに至つたのであります。

(2) 御國體と佛教　此事は前にもお話した所がありますから、ざつと申上げて置かうと思ふのであります。私の考ふる所では御國體に於ては御皇統が一番大切であつて、それから廣く教を容れる包容の精神、日本の神樣を敬ふ意義、それが道德的であつて宗教の色彩を帶びて居る。單に道德でもなければ又全然宗教でもない。日本の敬神の觀念は宗教を表にして現はれては居らぬが、道德的で宗教の色彩を帶びて居るものでありまして、それが日本の御國體の一番大切の所であると思ひます。

佛教徒の中に於ても、色々日本の御國體を大切に思ふた人が現れて居るけれども日蓮上人が其最も著しきものである。御皇統の大切であらせらるゝと云ふことについては、日蓮上人は日本の國の優れたことを申しまして、世界中の國に於て日本位尊い

國はない。即ち八萬の國にも超えて居る國であり、又御皇統は天照大御神の御魂を御受けになつて、尊き意味合のものであると云ふことを、到る處に書いて居ります。日本國が八萬の國に超勝したと云ふ點は大事の點でそれをはつきり意識し、はつきり言明したのは日蓮上人であります。日本と云ふ名は一番目出度い名であると申して居ります。又包容と云ふとについても其精神は佛教徒に依て明かになつて居る。包容の精神は却て惟神の道を教へて來た者の觀念は狹隘で、日本の大精神を明かにした者は儒者にも非ず神道者にもあらず佛教徒である。それから又國を思ひ日本の神樣を敬ふ精神となると、元來日本の包容の精神を顯すものは佛教であります。今まで佛教が斥けられたのは了簡の狹い者から斥けられたのであります。故に日蓮上人の如きは三教融合について、最も明かに論ぜられて居るのでありまして即ち統一主義であります。日本の建國以來の大精神を日

蓮上人が明かにしたもので、此位有らゆるものを包容して居るものはない、全く日本人の思想を代表して居る者であります。それから敬神の本義について考へても、道德的にこれを尊敬しなければならぬが、日蓮上人は無論道德的にして而かもそこに宗教の意味を以て尊敬し、さうして國の護り神として尊敬して居ります。國の護り神と云ふことを明かにしたことは儒者にも教育者にもない西洋の學者にもない。又神道家に於ては國の護り神と云ふことを宗教の意味から見て居らず、或は絶對の神樣のやうに云つたり又は色々に云つて居る。けれども國の護り神と云ふものは一方から云へば、道德的敬神と併せて宗教的適當の觀念を以て見なければならぬので、永久に日本の敬神の觀念はこゝになければならぬと思ひます。單に文部省の訓令で敬神の本義は斯うであると云つたり、或は神主などの云ふ如くに說いても駄目である。日本の敬神の觀念は公平の眼から見て基督

教の觀念からも佛教の觀念からも侵されないので、有らゆる宗教學派から見て適當の觀念であつて、さうしてそこに敬神の觀念を維持して行くと云ふ所の、立場に立たなければならぬと私は思ふのであります。

日本に於て佛教は其點を融合して來て居るので、これがうまく往かぬ所に一實神道とか、兩部神道とか云ふものが現れて來て居る。けれども完全に現れて來たのは三教融合神道派の北畠親房卿であるとか、或は日蓮上人の如き人の考は道德的であつて、そこに宗教の意義を適當に加へて來たものであります。

(3) 日本の國民性と佛教　日本の國民性と佛教は如何なる關係にあるかと云ふと、日本の國民性にも長所もあり短所もあるから、長所は益〻發揮し短所は愈〻改良しなければならぬ。其場合に佛教が日本の國民の長所を傷け、短所を助長するかと云へば決してさうでない。勿論佛教の迷信などは除かなければならぬが健全なる佛教の思想は日本の健全なる精神を助け、翼賛し一方に短所を矯正する指導者であります。例へば實行的の國民であるとすれば佛教は無論宗教でありますから、學問や道德よりもより以上に實行を明かにする、信仰は直ちに道德の實行を促し、完全の宗教家は己の信ずる所を實現するために有らゆる困難を忍んで進んで居る。又國民の度量が廣濶で包容的の國民であつたら、佛教は尙頗る包容的の思想を教ふるものである。又日本の國民が應化性とか、同化性と云ふやうに調節して行く思想があれば、佛教は世界に於て最もよく日本に適合して居るものである。又國民に統一性があり色々の智識文明を統一すると云ふことであつたら、佛教は頗る包容統一の思想に富んで居るものであつて、決して哲學や宗教と云ふ風に分けなでい統一して行くものである。さう云ふ風に色々長所がありますが其短所を擧げて云へば日本人は短氣であつて、善い事でも少しやる

と直ぐ飽きてしまふ。又淺薄の風があつて、哲學的に深く研究せぬで上面の研究で止めるとか云ふ短所があり、尙ほ數へ擧ぐれば限りがありませぬけれども、それ等の事は佛教に依て短氣になるかと云へばさうでない。佛教を信じて短氣になつた者は決してない、佛教を信じて虛榮心を起したとか、彼は佛教を信じて思想が淺薄になつたと云ふ者はない。大抵の國民の短所國風は佛教を信ずれば矯正され長所と認めらるゝ所は益〻助長さるゝのである。佛教を公平に見たら日本國民を適當に矯正して行くものと見るのが穩健の思想であります。

(4) 儒教と佛教　佛教の日本化を見るには儒教との關係を見なければならぬ。儒教が日本文明に入つて居る以上、其接觸を如何に取つたかと云へば、兩者は相助くべき性質を有つて居るものである。殊に儒教が普及したのは佛教徒の力が與つて居る。又儒教が日本化することについては、誰がやつたかと考へて見

れば最もよく分る。儒教を日本化せしめたのは聖德太子、道眞卿、親房卿、日蓮上人、光圀卿と云ふやうな人々の力に依て居るので、儒者風に考へて居つた人の頭から儒教が日本の文明を助け發達して來たものではありませぬ。皆其間に佛教徒の力佛教の思想があつて佛教が日本化したのであります。

其一二の實例をお話すれば、儒教が日本化する大事の點は忠孝主義であります。儒教が忠孝主義となつて現れ、忠孝中に於ても大義名分を明かにした所の、忠孝主義及大義名分と云ふ思想でありますが、此思想を明かにして來たのは無論日本の御國體の靈德が然らしむるに違ひなく、日本建國の精神が然からしむるに違ひありませぬけれども、其近い所の原因と云ふものは誰がやつたかと云ふと今申した聖德太子、道眞卿、親房卿、日蓮上人、光圀卿等の力にあります。道眞卿は和魂漢才を發揮されて居りますけれどもそれは大分古い時代のことで其後に愈〻儒教

を取つて日本の國に當嵌めて、忠孝主義大義名分を發揮したのは日蓮上人であると云つて宜いと思ひます。又儒教が日本の忠孝道德に變つて來たのは前にも申した如く、伯夷叔齊の故事から變はつて來たのであつて、文天祥のやうな忠烈の人が出たのも亦他の忠臣義士も皆、伯夷叔齊の風を望んで起つたと云はれて居るが、日本にもこれが影響を與へた者であつて、光圀卿が大日本史を作られたのも、伯夷叔齊の傳を讀で感奮せられたのが本であります。一方に義公の感せられたのは、兄弟が讓り合ひをしたことを感じたので、自分の兄上の賴重を置いて自分が代を繼ぐことは出來ないと思はれた云々、と云ふことを書いたものがあるが、西山公隨筆と云つて義公自ら書いたものを見ると兄弟推讓の問題ではなくして色々儒學の事を書いた後に『文王は聖人なり武王は聖と申し難し伯夷が諫こそ正道なれ、武王簒奪の議遁れ難し、又書經を見るに殷を討つ時さま〳〵諭言多

く殷を討つて後も民の懷き難かりしを言辯多く宥められしこと堯舜にあるまじきと也夫れ大義の正道は云釋を用ゐず』と云ふやうなことがはつきり書いてあります。ツマリ伯夷叔齊が武王を諫めたのは正道で、武王が紂王を伐つたのは簒奪の責を遁れ難いと云ふことを書いて居るのであつて、これに感奮して日本にも斯う云ふ不都合の者が現れてはならぬと云ふ所から、大日本史を書かれたと云ふことであります。其外當時の學者で伯夷叔齊の事を論じない者は、到底道德を語ることが出來なかつた位で苟も勤王の事を說く者は、必ず一方伯夷叔齊の事を論じて居ります。伯夷叔齊の忠愛の觀念が大日本史となつて顯れ、さうして勤王の相續者か續々呼應するに至つたのであります。水戸學派が儒教を日本化したのは西山公が本でありますが、日蓮上人はこれより前に儒教を日本化するに努めた人である。日蓮上人は鎌倉幕府を諫めて、どうしても諫めが用ゐられないので、

身延山に隱遁したのであります。即ち一方には大義名分を明かにし政權が武門に移つたのを奉還し、御皇室の御稜威を輝かすやうにし、又一方には思想界の紛亂を統一して眞正の德教を立つる考で努力されたのであるが、此法と國との大義名分が明かにならぬと云ふことを歎いて、樣々に諫めたが用ゐられなかつたので止むを得ずして身延山に隱遁したのであります。

又た『法を知り國を思ふ』と云ふことを上人自ら云はれて居る。諫めて用ゐられずんば山林に身を隱すと云ふことがあり、或は三度諫めて退くは古の道なりと云ふことがある。それに依て上人は身延山に隱遁し、丁度伯夷叔齊が首陽山で蕨を採て食したと同じやうな境涯で終つたので、義公が隱居して西山公と稱して居たのと同じであります。此意味を十分解釋すれば日蓮と云ふ宗教家が儒教の精神に就ても模範を示し、一方には忠愛の精神であつてさうして伯夷叔齊の跡を追ふて居るのであります。

それから大義名分については屢〻お聞きでありませうが、開目鈔の中にも、自分の父が王の敵となれば父を捨て〻王に從ふのが孝の大なるものであると云ふことが言つてありますし、又『父母の謀叛などを起すに從はぬが孝養にて候』と言つて大義名分をはつきり書いて居る。それから儒教が實行的に變はつて來て王陽明學などが日本の學問に於ては空言でなく、倫理的の教として實行的になつて、素行先生の如きは武教を立て、有らゆる觀念に於て實行的となつて、儒教が顯れて來たと云ふことでありますが、此實行的の觀念に於ては日蓮上人などが最も實行的で儒教の忠君愛國の精神を其當時に實現したのであります。あの當時には學者も居つたのでありませうが、時の狀態を歎いて政治家を諫めた者も無く、勢力に盲從する者が多かつたにも拘らず日蓮上人は源平二家を王の門を守る犬二匹候と云ひ、或は北條に對して謀叛人であると明言して居る。これ抔は儒教の道

德を實行的活動的に顯して居るのでありまして、佛教徒であるからと云つてぼんやりして居る所の者でない。其外儒教が日本化して來たことについては餘程佛教の力がある。武士のみならず民間にまで行き亘つた儒教、即貝原益軒先生などの思想から民間の商人に迄入つたのでありますが、一方には多く僧侶の手を傳ふて所謂寺小屋を傳ふて日本の文明に入つて居る。武士が閥族的に日本の文明を進めた者として任じて居るが、廣く民間に儒學を傳へたのは佛教徒であつて、大學論語の本を開いて讀むとは誰に多く教はつたかと云へば、佛教徒に多く教はつて居る。其間に儒教の話と佛教の話とが多少調和されて國民の思想に吹込まれたのでありますっ德川時代には變屈な學者や武士が佛教を斥けて居るが、廣く解釋すれば今でも儒教の教は佛教徒から入つて居る。今日の教育でも小學校抔は儒教を尊重しないし又儒者は衰へて居るから、大學論語を取つて國民に儒教の精

神を鼓吹する大多數の者は佛教徒でありまして、今日は勿論將來も矢張さうであらうと思ひます。佛教を除いて儒教だけが國民の思想に入つて行くと云ふとはどうしても考へられませぬ。

(5) 佛教の使命　前にも申しました通り佛教の惡い所は無論改良を加へて行かなければならぬのでありますが、併し健全なる佛教の上には確かに、日本國の本來有つて居る建國の理想を發揮する上に大に關係の有るものがあります。日本建國の本來の神秘な事を說明する上に於ても、宏遠なる世界大の理想を發揮する上にも佛教が翼賛する事は餘程大事な點であります。即ち日本建國の神秘及日本の世界大の理想を翼賛する事は、佛教の使命であります。それから現代の弊害が思想の奥深い處から起つて居るから、たゞ一通りの儒教の道德でも在來の歷史因緣でも此思想の動搖を矯正する事は困難であつて、最も深き根柢からこれを導いて行かなければなりませぬから、此點に向つて佛

教は將來一層勵まなければならぬ使命があると思ひます。更に進んで世界の文明を融合して行く上に於ては、佛教の深い所にある文明を日本が有つて居らなければならぬので、これを他人扱ひにして進んで行つたならば、日本の思想上に於ては缺陷が多いことになりはせぬかと思ふ。更に新しき文明と云はうか、進んだ文明を築いて行くには昔の古い宗教の信仰でなく、又物質萬能の文明でもない、非常に深い知識を尊敬し深遠なる信仰を以て健全なる思想を必要とする。つまり理想を滿足し感情を滿足し、哲學の眞理と宗教の信仰が一致すると云ふ進んだ思想を以て文明の中心に置くと云ふことが、世界大の要求であります。さう云ふ場合には儒教は不滿を感ずる又或宗教は宗教の組織は宜いが、理性上の關係が破壞される。然るに佛教はそれ等に較べると根柢が健全で一方には宗教の信仰を鼓吹するやうになつて居る。眞に日本が世界の文明の中心たらんことを考へ

たならば、一日も早く理想にも信仰にも滿足を得らるゝものを立てゝ、世界に教へて行かなければならぬと私は信ずるのであります。尚ほさう云ふ考から西洋の思想界を一瞥致しますれば最初にお話しました通り、西洋の思想にも色々尊い所がありますがそれは自ら日本の在來の思想に依て、適當なるものに洗錬することが出來ると信ずるのであります。

詳細の事は、時間がありませぬから申し上げられませぬけれども西洋の思想の風潮として、統一の傾向を有つて居るものはどう云ふ所にあるかと云ふと、今迄述べた如く三教融合の思想を以て進んだならば我國は彼等にない立派な國家があり、彼等にない健全の宗教があり、又實行に於ても彼等の倫理に打勝つ所のものがある。三教融合して進んだならば決して西洋の文明に對して遜色なしと信じます。又理想の國家と云ふことを申しま

するが、無論我國は建國の事情が立派で歴史が美しいのである
から、思想の方面が貧弱になりたがる弊はありますが、其點を十
分にして進んだならば立派な國が出來ます。又西洋は學術が旺
盛であると云ふが、日本に於ても文部省が學術の奬勵に努めて
居りますから西洋に劣るやうなことはありますまい。それから傳
道の熱誠は西洋人の方が強い。日本はこれについては悲しい哉
或一部の宗教家が努力して居るのみで、全體に於て健全なる傳
道は行はれて居らぬ。たゞ傳道が行はれて居るのは聽く人をし
て滿足せしめるやうな事を言ふからで、本統の道を說けば聽く
人がなくなると云ふ有樣である。聽く人の氣に入るやうに迷信
を交へて說けば人が集まるが、嚴格なる意味で說けば聽く者が
少い、殊に傳道の機關が備はつて居りませぬから當分の間傳道
は西洋に遠く及ばないであらうと思ひます。次に西洋人は宗教
の意識が進んで居りますが、日本人は大體を通じて宗教に對す

る觀念意識が幼稚であります。此點は宗教の信仰をするとせぬ
とに拘らず宗教に對する觀察をもつと進める必要があります。
それから社會政策の實行も缺けて居りますから、佛教徒を活か
して働かして貢獻せしめなければならぬと思ひます。又人道の
精神、社會道德も宗教を善用しなければ單に學校教育のみでは
充分でありますまい、どうしても宗教の力と相伴はなければな
りませぬ。又個人の自覺は西洋ではやかましく言ふが、之は日
本では將さに起りかけて居りますから宜からうと思ひます。又
西洋の短所は極端に走り過る弊があつて、日本でも其弊を生じ
兎角極端に走りたがり政治上社會上、現に婦人問題などについ
ても現れて居りますからこれは十分戒めなければなりませぬ。
そらから薄べらの現實主義、自然主義或は法律萬能其他宗教に
ついて西洋には色々固陋の考があります、けれども三教融合の
思想を以てこれに對すれば西洋の固陋の弊害を受けませぬ。法

律萬能などと云ふことは我建國の精神にはないので、それより深い意味で現れて居ります。

併しながら、今の所では西洋の文明に接觸する準備が足りませぬ。たゞ、西洋の思想の良いものを迎へ悪いものを拒絶すると云つても在來の思想の系統を調べ、其思想を國民に復活しなければ西洋の文明に對して行くことは出來ぬと思ひます。それも古い建國の精神とか、儒教佛教の思想が今日の間に合はぬと云へば仕方がないが、段々調べたら日本の古代の歴史にある事實は立派であるし、儒教の精神も立派である、又佛教の教義信仰も立派であるから維新の武士の考へたやうな狹い考を繰返さないで、西洋の文明に當るには、在來の日本の文明に向つて新しき考察を加へ、さうして國民思想の健全充實を計らなければならぬと思ひます。

尚終りに一言して置きたいことは、佛教に對して綱常倫理を

破却するものであると儒者が申しました事は、永久に頂門の一針として考へて居らなければならぬとと思ふ。又神道派に就ては水戸學派などが批評して御國體の事を言ふは宜いが、其思想の狹隘なるは語るに足らぬと罵つて居りますが、御國體を論ずる場合には狹い了簡に陷るは宜しくないと思ひます。又儒者が人格實在と云ふやうな深遠の處を棄てゝ、單に日用道德の考を立てゝ來たことは、今後の文明に取つては足らぬやうに思ひますから、佛教徒が忠告したやうに根柢ある教義信仰に依らなければならぬと云ふことを儒者輩が顧みて、互に親切の忠告を容れて、佛教徒は人倫綱常を破却するやうのことなく人生に缺陷なきやうに努め、神道學者は狹隘固陋の見解を棄て、又儒者は佛教の教義信仰を採つて、そこに健全なる思想を立てなければならぬと思ひます。水戸光圀卿の如きも世間で思ふやうな排佛家ではありませぬ。これは儒者が自分の方へ引付けんが爲め、佛教

に溫かであつたと云つては具合が悪いから、排佛家のやうにして自分の方へ引付けたので、光圀卿自身としては日蓮上人を慕はれて、日蓮上人のために大きな學校を立て十七ケ條の規則を作つて居られますし、又日持上人が海外に傳道に行つた事を敬慕して、對馬の藩主に言付けて朝鮮に行つた日持上人の事蹟を調べさせて居る。さうして又神社に對しては淫祀迷信に關する寺社千八十六ケ所を廢し、一方に由緒ある寺社を保護して居られたので、敬神の觀念も奉佛の觀念も整ふて居つたのであります。然るに後代の儒者が光圀卿は敬神崇儒の人であると云つて排佛家のやうに言つたために、段々世人をして排佛家と思はしむるやうになつたのであります。昔の達人にはそんな人はなかつた事が今日では漸く分つて參りました。これは德川時代に儒者が跋扈した爲めの弊風であつたが、それが幾らか今の教育家の頭に遺傳して來て居りますから、深遠なる信仰の問題などを

報いがあると云ふやうのことを僧侶が言ふのは、狸が附いて居ることであると云つて居るのは實に笑ふべき事で、尙色々の事を申して居りますが、要するに其見識が極めて卑いのであります。所が之を辯駁した儒者が『國意考を讀む』と云ふ題で書いて居る。それは野村公臺と云ふ人でありますが左の如きことを書いて居ります。

惜乎其不能潛心聖人之道而獨見我國上古淳素因循之治與彼老聃無爲自然之道相似也 以爲異域同揆 治國之道莫善焉 皇祚之長久勝於萬國者 以此道已於此貶譏儒道爲小爲僞歷詆群聖無所忌彈也眞淵動曰直々所謂直者直情徑行直乃戎狄之道也 其不知聖人之道於是亦可以見焉 又有同母爲兄弟異母則姉妹姦通母禁說此則禽獸知母而不知父

之類也非人道矣以此爲國美事甚矣其惑也不直同人道於禽獸也至謂唯人有智故惡禽獸無智勝於人焉甚矣乎其言之也

儒教の見識を以て辯駁したので寔に論旨明白でありますが、それが佛教のことになると次の如く言つて居る。

要之雖讀聖人之書不知聖人之道也是以致此乖戾陷罪焉而惜夫其餘僻見强辯不足論矣若其破釋氏應報之說及駁我國近世所稱神道者之類則確論也君子或取之

是も亦偏見を以て論じて居る。それから又更に進んで儒教と神道と佛道との三つを併せて見る人が出て來た。それは三芳野城長と云ふ醫者でありますが、此が亦『國意考辯妄』と云ふ書に、我國は神儒佛三道を融合して進まなければならぬと論じて居り

ます。その序に

『世の教たる神儒佛の三のみ　天地間更に餘道ある事なし有るに似たるは皆邪岐旁徑にして趣向すべからざるものなり

近世一種の國學者あり　儒を非り聖を罵り佛を罔す　特に神道を僻解し昆弟叔姪の亂婚を以て皆國の道とするに至る誣妄狂濫誰か是を知らざらん　加茂眞淵實に之が兇魁たり……

……夫れ狗徒鼠輩の肯ふと肯はざるとは姑く置く　凡そ三教を奉ずる大丈夫たるもの　豈居なから大道の廢棄し人倫の頽壞せんとする胚胎を見るに忍ひんや

又『國意考辯妄』の終りに

佛を罵りて人を殺すと云ふとも報ひはなき事なりといへる類種々の邪說ありといへとも皆餘りに道理に背きたる事と

もなれば童子の輩をして讀ましむるとも皆よく其非を知るべし故に辯此に及ばざるなり

斯樣なことに就て諍つて居つたのであります。是に由つて古學復興學者の思想が分かる、熾んに佛教や儒教を害物呼ばはりをして居つたのですが、獨り加茂眞淵翁のみならず本居平田の二氏も皆同じ精神であります。勿論御國體の光輝を發揚せんと努めたる點は賞すべきでありますするが、其の他は孤立的に國家を說明して居つたのでありますから、筧博士の所謂四年生と看做すべきものであります。

儒者としては水戸の儒者が、儒教と神道の精神を融合したのは宜いが、非常の立派の學者であつても深遠の哲學の思想を缺いて居る憾みがあります。それで先づ古學復興の神道家と水戸の

神儒融合の思想との此二つは、日本の維新以前に於ける重もなる國家的思想であつて、そこへ西洋の思想が入り來つて現代の思想を生んで居るのでありますから、此間の思想を少し明かにしなければならぬ。

見識の高い儒者の說としては、水戸學派の會澤正志の新論であります。是は諸君がお暇があつたら御覽になつたら宜からうと思ふ。御國體其他我國の事に付て論じて居る所が非常に立派なものであります。德川時代に出た儒者中では會澤氏の說は隨分卓越した說と思ひます。併し又偏つた說もあります。

兎に角德川時代に於ける古學復興の思想若しくは儒者の思想などは、狹隘に失する所がありましたが、段々それが融合せられ、又佛教其他の總ての思想が追々と一致して進んで行く所に

日本の健全の思想は有るのであります。今日でも西洋の思想に對して一概に之を斥けるのが宜い譯でもなければ、又西洋の思想に囚はれるのが宜い譯でもありませぬ。

前よりお話したことを一先つ結んで置かうと思ひまするが、佛教の方に於ては日蓮上人が、國家と佛教との關係を說明せられたは、立派と云ふよりは寧ろ模範的の思想を示して居りまするし、儒者としては御國體を擁護する思想を發表して居るのは、會澤正志先生の新論などが立派なものでありまして、迚も古學復興學者などの說とは較べものになりませぬ。非常に廣く儒教の精神と御國體とを論じて居ります。日蓮上人の立正安國論の精神、會澤先生の新論の思想、それから眞淵翁あたりの古學復興の精神などを共に合せて融合して、始めてそこに國體觀念も

國民道德も顯れて來る。又西洋の基督教の愛の精神、社會事業に努力する方面などは、採つて以て模範としなければならぬ。たゞ基督教の國家觀念が、我國の思想と一致するか否やは問題でありますが、彼等が博愛の精神を以て到る處に傳道して、人間に親切を施し社會的の事業を起して行く處、愛の精神を發現して行く處などは非常に勝れた點であります。又西洋近世の文明が與へた科學的知識も、今更申迄もなく科學的知識としての程度に於て採用して行けば、人民の幸福國家の繁榮を增す所のものでありますから、どこ迄も科學の知識は尊重しなければならぬ。又西洋の倫理說は個人の力を强く認め個人本位で法律を立てたり何かするのは宜しくないが、個人の責任を自覺させて自我を認め又他人を尊敬し、自分も責任を覺悟して進んで行く

處は採つて用うべき思想てあります。此健全なる個人の自覺、健全なる科學の知識、又基督敎の愛の觀念、事業の精神などは採つて以て我國の文明に融合して一向差支ないものであります。さう云う思想をもう少し參酌すれば益する所多く、我國の特殊の道德、忠愛の觀念を養ふ上に於て大に助けとなる所のものがあらうと存じます。たゞ排斥的に他の思想を敵とし、宗敎の信仰を敵とし、世界の文明を顧みずして忠愛の觀念を說くやうのことをせず、有らゆる方面を包容して其中心を養ふて行かなければならぬから、直接に云へは諸君は先づ忠君愛國の精神を養はなければならぬと同時に、一方には個人の自覺個人の力量を養ひ世界的人道を重んじさうして天地偉大の神を敬し、世界の文明を包容し、世界の中心として皇運を扶翼するとに努力しなけ

ればならぬ。爰に於て始めて個人の德も、國家の德も世界的の德も天地の德も實現して來るのであります。決して他を敵とする爲めではなく、是等の德を實現する爲めに忠愛の精神を養ふのであると云ふやうに考へて貰ひたいのであります。さう云ふ理想でありましたら今の敎育家の或者の言ふやうに、宗敎と敎育とが衝突するとか、或は道德と宗敎と一致しないと云ふやうのことは決して言ふとが出來なくなる。どんなに深く宗敎を信じても差支ない、どんなに哲學を學んでも差支ない、又世界的の思想を吸收しても差支ない。たゞ其中心を忠君愛國の基礎に築いてそれを十分養ひ固め、それより出發すれば何をやつても差支ないのであります。即ち包容的國家思想に統一的の思想を加へて行くのであります。それが則ち我國の天職である大和魂で

ある。陛下の御製に依るも如何なる困難な事が現れて來てもそれに屈せず成し遂げるのが、大和魂であると云ふことを仰せられて居ります。

今の時代は在來の思想と新しい思想とが入り紊れて、人心を動搖せしめて居りますから困難でありますが、要するに我國の建國の御精神を戴いて、西洋文明の思想も佛敎の思想も基督敎の思想も包容し、其勝れたる所を採つて之を統一し、堂々として進んで行く覺悟がなければなりませぬ。

又諸君は自分自らさう云ふ覺悟をするのみならず、部下が色々の思想を抱いた時にそれをたゞ抑へ付けてはなりませぬ。會澤正志先生の說にも國家は威力と德化とを以て人民を治め、一時の事は威力を以て抑へるも宜いが、永久の事は威力に依らず、ど

こまでも正義に依り、德に依て化するやうにせなければならぬと云はれて居ります。あなた方が部下を率ゐる心も亦其の如く、上下の階級があり、又統御の必要上叱り飛ばすこともありませうが、それは一時の威服の方法であつて永久には德を以て化し思想の上から心服せしむるやうの方法を取らなければならぬ。

さうするには今後多くの部下の中には色々の思想を抱いて來る者があるに相違ないから、其思想を啓發してやらなければならぬ。必ず宗敎の一角とか、儒敎の一角とか、近世思想の一角とか小さな思想に囚はれて居る人がありますから、悉く之を調和して建國の大精神と一致するやう、導いて行かなければならぬと思ふのであります。

尙此問題に付ては今迄日本に顯れて居る學者の說、歷史上に顯

れた國家の事情を、もう一層精しく調べ、更に進んで御國體觀念に付て申述べたいと思ひます。

大正二年十月二日印刷
大正二年十月七日發行

定價金貳拾錢
郵稅六錢

東京市四谷區片町十二番地
編纂兼發行者　高橋靜虎

東京市麹町區飯田町五丁目六番地
印刷者　中山千二

東京市麹町區飯田町五丁目六番地
印刷所　大正社

不許複製

所

東京市四谷區片町十二番地
軍事教育會
振替口座東京四〇五四番
電話四谷番町六九四番

325
192

終

始